

地理紀要

第 34 号

2017

神奈川県高等学校教科研究会社会科地理分科会

目 次

世界を見る

北イタリアの「自治都市」を巡る（Ⅱ） 福元雄二郎（神奈川県附属中・高等学校）・・・ 2

インド・ラダックの生活文化 吉村 憲二（県立横浜緑ヶ丘高等学校）・・・ 7

私の教材紹介

新科目「地理総合」とは
－「地理基礎」から考える－ 根元 一幸（県立座間高等学校）・・・ 11

夏季野外調査報告

宮城・震災復興の現状と課題 齋藤 兆生（県立希望ヶ丘高等学校・定）・・・ 18

委員会報告

身近な地域の教材化
－地域研究委員会夏季新横浜巡検－ 井上 達也（県立鶴嶺高等学校）・・・ 22

横浜市関内地区の巡検
－地域研究委員会冬季巡検－ 中島 功（県立有馬高等学校）・・・ 26

トライ地理20について 山本 敦（県立相模原中等教育学校）・・・ 28

地理学カテストと2016年度の問題について 伊藤 直樹（栄光学園高等学校）・・・ 30

北イタリアの「自治都市」を巡る（Ⅱ）

福元 雄二郎（神奈川大学附属中・高等学校）

はじめに

地理紀要第33号では、『北イタリアの「自治都市」を巡る』と題して、主に北イタリアの東部のエミリーオ・ロマーニャ、ヴェネト両州の都市を紹介させて頂いた。本稿ではその続きとして、西部に位置する、レゲーリア、トスカーナ州の都市を紹介させて頂きたい。前稿同様に、少しでも先生方の授業に少しでも役立てて頂ければ、幸いである。

1. 北イタリア西部の概要

北イタリア西部はレゲーリア(リグリア)海に面した地域である。一般的にこの海岸地域はリヴィエラ海岸とも称されるが、リヴィエラとは本来、イタリア語で「岸」を意味し、レゲーリア州の州都であるジェノヴァより西側を「西リヴィエラ」、東側を「東リヴィエラ」と区分している。東西リヴィエラともに、フランスのコートダジュールから続く世界的な海岸保養(観光)

地となっている。日本でも音楽祭が開かれることで有名なサン・レモなど「西リヴィエラ」の開発は歴史が古く、18世紀中頃まで遡る。これに対して、「東リヴィエラ」が観光地として特に注目されるようになったのは、1997年にイタリア海軍の軍港であるラ・スペツツィアの西岸一帯が「ポルト・ヴェーネレ、チンクエ・テッレと小島群」の名称でユネスコの文化遺産に登録された以降のことであろう。アペニン山脈の南麓が海岸まで迫り、急崖が続く「東リヴィエラ」のこの一帯は交通の便が悪く、まさに陸の孤島と呼べるような地域であったが、現在では、年間250万人にも及ぶ観光客が訪れる世界的な観光地へと変貌している。本来、「東リヴィエラ」一帯の海岸地域は、ジェノヴァとフィレンツェ、ピサといった北イタリア西部を代表する観光拠点に挟まれた地域であり、これらの観光拠点から日帰り観光することが可能なことが、多くの観光客を集める大きな要因となっている。前稿で紹介させて頂いたミラノ、ボローニャ、ヴェネチアなどの「自治都市」をポー川流域の沖積平野に点在する都市群とするならば、本稿で紹介する北イタリア西部の「自治都市」は山、川、海といった自然的な要害で囲まれた都市群であり、また、そこが多くの観光客を引きつける魅力にもなっている。



図1 北イタリア西部の概略図

2. ジェノヴァ

ミラノから高速7号線に乗り、ロンバルディア平原を南下する。直線的で平坦な道路を約1時間走行すると道路は登り坂となり、トンネルやカーブが多くなる。この上り坂を登り切ると、高速道路は大きく東へと迂回を始めるが、そこがジェノヴァへのインターチェンジとなっている。インターチェンジを降りると一転して下り坂の一般道となるが、そこはもう中低層のカラフルな家屋が密集したジェノヴァの市街地である。この道を降りきってしまうと、目の前に忽然とレゲーリア海に面したジェノヴァの旧市街地が出現する。平坦な後背地を持たないコンパクトな港町。これがジェノヴァの第一印象であ

る。ミラノやトリノといった工業都市が背後に控えるジェノヴァはイタリア最大の貿易港であるが、コンテナ埠頭などを備えた新港は、この旧市街地の西側の海岸線に約30kmに渡って展開しており、この事実を知らない観光客には、ジェノヴァは純然たる観光都市にしか映らないであろう。

ジェノヴァの繁栄の歴史は大きく2つの時期に分かれている。前期はルネッサンス期を頂点とした海洋都市国家としての繁栄の時代。そして後期は、大航海時代の金融国家としての繁栄の時代である。ジェノヴァの都市共和国(コムーネ)としての成立は1005年とされる。1162年には、イタリア王国消滅後、北イタリアの王位継承権を主張して勢力を伸ばしてきた神聖ローマ帝国皇帝フリードリッヒ1世に改めて自治権を認めさせている。ジェノヴァの海外進出をもたらすきっかけとなったのが、1098年の第1次十字軍への参戦である。このときの功績を認められたジェノヴァは、東地中海での自由交易権を獲得し、エーゲ海からシリアとトルコ国境のアンティオキア一帯にかけていくつかの商業拠点となる植民地を獲得する。特にこの中でも重要な拠点となったのが、トルコのイズミルの沖合に位置するキオス(ヒオス)島である。この島は二つの意味で重要なジェノヴァの拠点となった。一つ目が、この島を占領したことでイズミル周辺で産出された明礬を独占的にヨーロッパへ輸送する権利を得たことである。明礬は当時、ヨーロッパの毛織物産業の染色にとって不可欠な原料であり、明礬はキオス島からジェノヴァ経由でフランドル地方などの毛織物産地へと輸送され、膨大な富みをジェノヴァにもたらした。この島のもう一つの重要な点は、この島を抑えることで、ボスポラス海峡を経て黒海に至る航路の制海権を得たことである。その後、ジェノヴァはクリミア半島にまで勢力を拡大し、13世紀後半から14世紀にかけて海洋都市国家としての絶頂期を迎える(図2)。しかし、最大のライバルであるヴェネチアやピサとの度重なる戦争で戦費がかさみ、財政状態が逼迫したことや、セルジューク朝トルコに代わって台頭を始めたオスマントルコによってエーゲ海一帯の植民地を次々と失ったことなどによって海洋都市国家としてのジェノヴァは衰退を始めた。



図2 ジェノヴァ旧市街地に残るソプラナ門(12世紀)

皮肉なことに金融都市国家としてのジェノヴァの繁栄はここに始まる。財政が逼迫したジェノヴァは度々、国債を発行するようになるが、その売買を通して次第に「コンベラ」と呼ばれる債権団体にまとめられるようになり、1408年に複数の「コンベラ」が合併する形で創設されたのがサン・ジョルジュ銀行である。サン・ジョルジュ銀行が発展するきっかけをもたらしたのがクリストファー・コロンブスだ。ジェノヴァ出身とされるこの商人の航海を財政的に支援したのが、当時、スペインのセビーリャに勢力を伸ばしていたジェノヴァ商人達であり、その背後にはこのサン・ジョルジュ銀行が存在した。その後、新大陸から流入するスペイン王室の銀の管理もサン・ジョルジュ銀行が取り仕切るようになり、16世紀末にその量が頂点に達した。ジェノヴァはヨーロッパの金融センターとなったのである。現在、ジェノヴァ観光の目玉となっているのがストラデー・ヌオーヴァと呼ばれる一帯に点在するこの当時の貴族や資産家達が迎賓用に用いた屋敷群で、「ロッリの邸宅群」の総称で世界遺産に登録されている。しかし、ジェノヴァの繁栄の時期は決して長くは続かなかった。スペインの衰退とともにジェノヴァの国力も徐々に衰え、最終的に、1797年にナポレオンの率いるフランス軍に占領されることによって幕を閉じたのである。サン・ジョルジュ銀行も1805年に閉鎖された。

3. チンクエ・テッレ

チンクエ・テッレとはイタリア語で「5つの土地」を意味する。ジェノヴァの東、約50kmの海岸線に沿って点在するモンテロッソ・アル・マーレ、ヴェルナツツァ、コルニーリア、マナノーラ、そしてリオマッジオーレという5つの小さな集落からなるこの一帯は1997年にユネスコの世界遺産に登録され、一躍、「東リビエラ」を代表する観光スポットとなった。この観光地を訪れる手段としては鉄道か遊覧船を利用するのがベストだ。鉄道は、山頂に集落があるコルニーリア以外は、集落内に駅があり、ジェノヴァーピサ間の列車が1時間に2～3本の頻度で停車するので、短時間でこれらの集落を回るのは便利である。しかし、これらの集落の最大の魅力は、海岸に張り出した岩壁に張り付くように密集した集落の景観であり(図3)、それを楽しむためには、チンクエ・テッレの南北に位置するポルト・フィーノやポルト・ヴェーネレなどの観光拠点から運行されている遊覧船を利用するしかない。どの集落も大型船が停泊出来るような船着き場がなく、海が荒れている場合には、着岸出来ない場合もある。人口が千人に満たないような小さな集落群だが、レストランやお土産屋が軒を連ね、観光客であふれている。この中で特に目立ったのは中国人観光客だ。一昔前までは団体・集団行動型の旅行客が中心だったが、今では、小人数で自由行動を楽しむ中国人観光客が目立つようになった。彼らを観察していて気づいたことがある。ほとんどの観光客が旅行用のガイドブックを持参していない。持っているのはスマートフォンである。彼らはインターネット上にある中国人専用の旅行サイトやSNSを利用して目的地を決めて行動しているのだ。特定の観光スポットだけに中国人観光客が集中する理由はここにある。

チンクエ・テッレの集落は本来、11世紀にジェノヴァを守るための砦として建設されたものであり、ヴェルナツツァには今でも当時の見張り用の塔が残されている。チンクエ・テッレの南側に位置するラ・スペツィアは、現在のイタリア海軍の軍港であるが、そこからバスで30分ほど南に下ったラ・スペツィア湾の突端にあるポルト・ヴェーネレは、かつての海洋都市国家ジェノヴァの軍港だったところである。岬と

沖合のパルマリア島の中に挟まれた入り江は、アドリア海側からは視界に入らず、多くの軍船を隠すのには絶好の場所だったのだろう。現在、この岬を囲むように残る城壁や要塞、旧市街からなるポルト・ヴェーネレもチンクエ・テッレと一緒に世界遺産に登録されている(図4)。



図3 リオマッジオーレの集落



図4 ポルト・ヴェーネレの要塞から見たラ・スペツィア湾。右に見えるのがパルマリア島

4. ピサ

ピサもジェノヴァやヴェネチアと列ぶ、海洋都市国家として繁栄した都市である。しかし、この両都市と違ってピサは海に面した都市ではない。アルノ川の河口から約8km内陸に入ったところに位置している。ピサの歴史を知らない観光客の多くは、この都市が海洋都市国家として繁栄した事実気がつかないまま終わるのではないだろうか。現在、アルノ川の河口域は湿原地帯として自然公園に指定されている。古地図を見てみると、中世の頃はこのような湿原地帯がピサの西側まで広がっていた。また、アルノ川の北を流れるセルキオ川が大きく蛇行し、河口域には多くの湖沼群が点在していた。これらの湖沼群は水路で結ばれ、商船や軍船の停泊地として利用されていたのである。当時、北イ

タリアで用いられた船舶はガレー船が中心であり、喫水線が浅かったために、このような自然条件でも貿易港として発展することが可能であったと考えられる。

ピサの歴史は、ジェノヴァに比べるとはるかに早い。ローマ時代には既に軍港として利用されていたようである。その後、11世紀になると都市共和国となるが、ジェノヴァ同様に海外植民地拡大のきっかけとなったのが、1096年の第一次十字軍への参戦である。ジェノヴァとの制海権をめぐる争いを繰り返しながら、ピサは12世紀から13世紀にかけて最盛期を迎える。この時期に市内に建設されたのがドゥオーモ(大聖堂)、斜塔、礼拝堂、納骨堂からなる建築物群であり、現在のピサ観光の中心となっている。この中でも世界的に有名な斜塔は、本来、鐘楼として1173年に建設が着工されたが、建設工事は約200年にも及んだ。その理由は、地盤が砂質からなるために、建設途中から傾き始めたためである。実は、斜塔の最上層はこの傾きを修正するために鉛直方向に修正が試みられている(図5)。ドゥオーモは1067年に着工が始まり、1118年に完成したロマネスク様式の建築物である。イタリア国内でも最大級のロマネスク様式の建築物で、当時のピサの繁栄がよく理解できる。しかしピサの繁栄は長くは続かなかった。1284年、宿敵ジェノヴァとの海戦に敗れたピサは、海軍力が弱体化した。さらに、アルノ川やセルキオ川の流路が変更したことにより、徐々に湖沼群が干上がり、港としての機能が失われていった。そして1406年、同じアルノ川中流域の都市共和国、フィレンツェによって占領され、幕を閉じたのである。



図5 ピサの斜塔と大聖堂(ドゥオーモ)
斜塔の鉛直方向の修正が良く判る

5. ルッカ

ルッカは、ピサの北東約20km、セルキオ川中流域の左岸に位置する。都市共和国の成立はピサとほぼ同じ頃と推測されるが、共和国として存続した時期はピサよりはるかに長い。歴史上、共和国はナポレオンによって占領された1805年まで存続した。ルッカの繁栄を支えたのが絹織物産業である。5世紀になると絹織物産業(養蚕業を含め)は東ローマ帝国周辺に定着した。その後、十字軍の遠征によってその技術はシチリア島を経て、北イタリアへともたらされた。北イタリアで絹織物産業はユダヤ人商人達などにより問屋制手工業へと発展し、独自の展開をするようになる。最初は東ローマ(ビザンティン)や中国様式の模倣に過ぎなかった生地(絵柄)も、ルネッサンス様式の絵柄へと変化し、特に金糸や銀糸を織り込んだルッカの絹織物は最高級品として、ヨーロッパ全土に知られることになる。最盛期には、ルッカの商人達はフランドル地方やパリなどにも支店を構えていたようだ。

ルッカの見所は2つある。1つは、周囲4kmに渡って旧市街地を取り囲む城壁である。とは言っても、現存するものは16世紀になって改修されたイタリア式星形要塞だ。重火器を用いた戦術への変化により、石材を用いた高い城壁から、低く赤煉瓦などを用いて星形の稜堡をもつスタイルへと城塞はこの時代に変化している。

もう一つの見所は、旧市街地に残されたロマネスク様式の建造物群である。特にその中でもサン・ミケーレ・イン・フォーロ教会は必見である。ルッカ様式とも呼ばれる、独特のファサード様式の正面部は実に見事な象嵌細工の装飾が施され、最上部には天使ミカエルの象がそびえている(図6)。

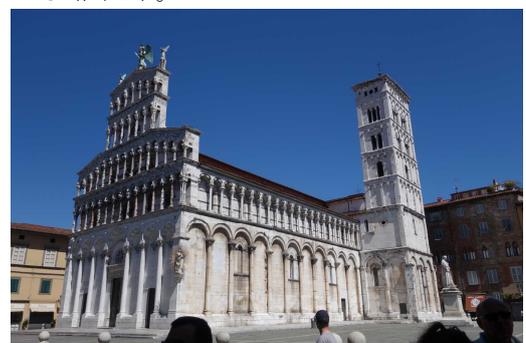


図6 サン・ミケーレ・イン・フォーロ教会の全景

6. シエーナ

シエーナはフィレンツェから南に約50km下ったところにある。現在の市域人口は約5万人と、同じトスカーナ州の都市の中では、ピサやルツカの8万人代よりも規模が小さい。しかし、ルネッサンス期、フィレンツェの最大のライバルとなったのがこのシエーナである。中世になり、イギリスのカンタベリーとローマを結ぶ巡礼の道としてフランチジエーナ街道が整備された。シエーナはこの街道沿いに立地しており、巡礼者達の換金業務を通して金融業が発展した。現存するヨーロッパ最古の銀行と言われているモンテ・デ・パスキ・ディ・シエーナ銀行(BMPS、現在イタリアで第3位の銀行)もこのシエーナで設立された。しかし、このことが同じ金融業で栄えたフィレンツェとの軋轢を高める結果となった。また、各都市共和国内外で皇帝派(ゲベリン)と教皇派(ゲルフ)間の対立が生じたときにも、当初、シエーナが主に皇帝派の立場に立っただのに対して、フィレンツェは教皇派を支持したために、両者の関係はさらに悪化した。1260年のモンタ・ルティの戦いでシエーナ軍は数で勝るフィレンツェ軍に勝利するが、最終的には、1555年に神聖ローマ皇帝カール5世支配下のスペイン軍によって滅ぼされ、その後、その領地はフィレンツェ公国に割譲された。

シエーナの見所は、フィレンツェとの抗争が繰り返されていた13~14世紀に建設された旧市街である。「シエーナ歴史地区」の名称で1995年に世界遺産に登録されている。特にその中でも市街地の中央に位置するカンポ広場は、中世の都市広場としては最大級のもので、広場の傾斜を巧みに利用して、1点に雨水を集められる構造になっている。毎年2回、この広場を使って行われるパーリオと呼ばれる伝統的な競馬行事は世界的に有名だ(図7)。シエーナ市内は14のコントラーダと呼ばれる地区に分割されているが、この中から抽選で選ばれた10地区の代表が、裸馬に乗って広場を3周して順位を競うものである。著者が訪れたのは8月15日の「聖母の被昇天祭」の日で、2回目のパーリオの前日であった。カンポ広場の外縁部には競馬用に土が入れられ、仮設の観客席が設けられていた。街中至る所にそれぞれのコントラーダの旗が掲げられ、路上にはコントラーダ単位で行われる

宴会席が設けられていた。この時ばかりは、ローマやミラノといった大都市に出ている若者達も戻ってくるのであろう。それぞれのコントラーダの旗をマントやスカーフのように纏い、楽しげに街を闊歩する若者達がすごく印象的であった(図8)。



図7 パーリオの準備が整ったカンポ広場



図8 斜道に器用に席を並べ、食事会を楽しむコントラーダの若者達

おわりに

地誌学の本質は、地域の持つ多様性に目を向けることにある。この地誌学と、地域の共通性・法則性を見いだそうとする系統地理学の双方向的な見方によって、ある地域をより客観的に正しく見ることが出来る。北イタリアの諸都市は、このような地理学の基本的な地域の見方を再認識させてくれる良い機会となった。北イタリアの諸都市が見せる多様性は、国民国家イタリアの魅力になっている。しかし、それはイタリアが抱える様々な問題の根源にもなっていることを強く感じた。最後になるが、本稿では枚挙にいとまがなくなるので、フィレンツェについては割愛させて頂いた。機会があれば、またどこかで報告をさせて頂きたい。

インド・ラダックの生活文化

吉 村 憲 二 (県立横浜緑ヶ丘高等学校)

はじめに

インド北部のラダック地方は、ジャンムカシミール州の北東部に位置しており、かつては「秘境」と言われた。そのラダック地方を、2016年7月24日～8月2日にかけて訪れる機会を得た。その様子を報告する。

1. 中心都市レー

ラダックの中心都市レーは、デリーより国内便に乗り、約1時間で到着する。デリーを飛び立ちしばらくすると、カラコルム山脈の白い峰が目に見え込んでくる。着陸態勢に入ると、眼下には木がはえていない荒涼とした赤茶けた大地が広がる。レーの標高は約3,500mほどなので、到着した日は高度順化のためゆっくりと町を散歩することになった。

レーは人口が2～3万人で、町の南側をインダス川が流れている。対岸から見ると山の南斜面の、緑に覆われたこじんまりした町である。斜面に張り付いたような町であるため、坂道が多い。インドの地方都市なのだが、行き交う人々はチベット系の人々がほとんどで、インドで多数を占めるアリア系やドラヴィダ系は極めて少ない。同じチベット仏教だからだろうか。ブータンの首都ティンプーに雰囲気が似ている。しかし人や車の数はレーの方が断然多い。

挨拶は「ナマステ」ではなく、ラダック語で「ジュレー」である。ちなみに「ありがとう」

は「オ・ジュレー」なので覚えやすい。

近年は国内外の観光客の増加に伴い、市内や郊外にホテルやゲストハウスの新築がすすんでいる。その一方でバスなどの公共交通機関は観光には不便で、移動にはタクシーを利用することが多くなる。タクシーに使われているのは、意外なことにトヨタ車が多かった。スズキのマルチはたくさん見られたが、かつての国民車であるアンバサダーや、低価格で話題になったタタ・ナノなどの車はほとんど見ることはできなかった。

2. 高山病対策

今回は標高3,500mのレーを起点に、5,000m以上の峠を複数回越える予定だったので、高山病が心配された。そこで、日本で高山病予防の薬を服用して備えることにした。事前の情報ではダイアモックスという薬が有効らしいとのことだったので、処方してもらえる病院を検索した。病院では、簡単な問診と副作用などの説明を聞き、ダイアモックスを処方してもらった。高地に行く前日から、半錠を1日2回服用する。その効果なのかどうかは定かではないが、今回の旅行中は高山病と思われる症状はあらわれなかった。また、利尿などの副作用があるとのことであったが、そのような症状もあらわれず、ラダック滞在中は快適に過ごすことができた。



図1 レーの中心街

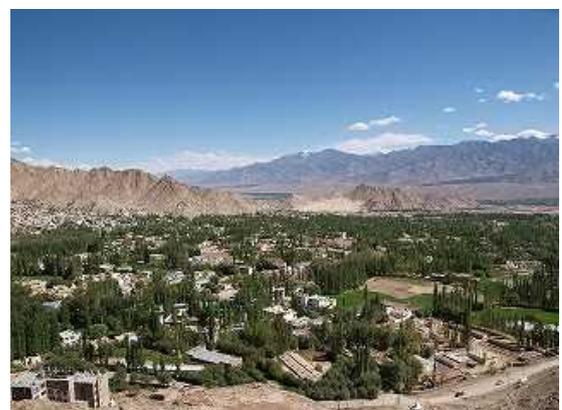


図2 緑に覆われたレーの市街地

3. チベット仏教

ラダックの住民のほとんどはチベット仏教徒である。マニ車を持っている人がいるし、街角には堂々とダライラマ14世の写真が飾られている。

レーに到着した翌日、インダス川対岸のストックという集落に向かう際に、レーの中心部から街道沿いに多くの人々が盛装で出てきていた。タクシーの運転手に「何があるんだ」と尋ねたところ「今日、ダライラマがラダックに到着するから、その姿をひと目でも見ようとしているんだ」とのことであった。ダライラマは、これからしばらくの間はラダックに滞在して、各地で法要を行うということであった。これは毎年行われていることらしい。

ダライラマ14世がチベット亡命政権を置いているのがヒマチャルプラデシュ州のダラムサラで、そこからラダックは至近な距離である。ここはチベット仏教徒の一般民衆が、ダライラマを大歓迎で迎え入れてくれる世界でも数少ない場所だろう。

ラダックの見どころのひとつがゴンパと呼ば

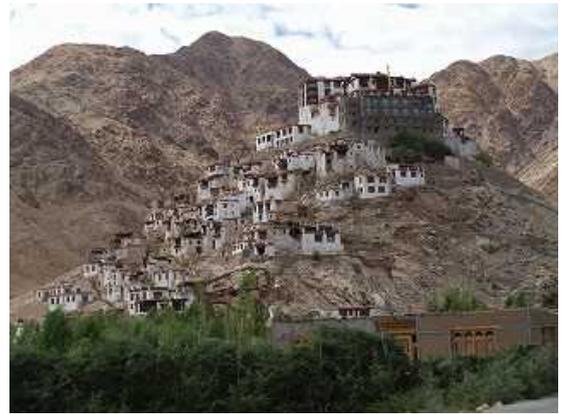


図3 チェムレ・ゴンパ

れる僧院である。丘の上などの見晴らしがいい場所に築かれていることが多い。丘の上にそびえるゴンパと、その周囲の僧坊の様子は、チベットのラサにあるポタラ宮に通じるものがある(当然であるが)。今回は大小さまざまなゴンパを訪れた。その中でも、レーの西のアルチにあるゴンパは平地に築かれているが、特に貴重な壁画で知られている。



4. 境界に接した地域

ラダック周辺の境界線は複雑である。東部では中国と、北部ではパキスタンとの間で、国境は未確定になっている。

境界地域に行くためには、レーの背後に屏風のようにそびえる急峻な山を越えなければならない。パキスタンとの境界地域に行くのも、中国との境界地域に行くのも、標高5,000m以上の峠を越えることになる。特にパキスタンとの境界地域に向かう途中のカルドゥン・ラ(ラは「峠」の意味)は5,600mを超えており、自動車道路としては世界最高所の場所だという(実際には、もう少し低いという話もある)。



図4 自動車道路の世界最高地点 カルドゥン・ラ

カルドゥン峠の南側は、荒涼とした急傾斜の斜面で、そこにへばりつくように道路が峠まで延びていた。しかし、カルドゥン峠の北側のヌブラ渓谷に入ると緩やかな斜面になっており、U字谷の底には緑が見られた。完全な非対称山稜である。

レーからヌブラ渓谷に向かう道路は、軍用道路として建設されたという。実際にカルドゥン峠の北側では、インド軍の駐屯地をいくつも見ることができる。住民よりも兵士の方が多いのではないかと錯覚してしまうほどだ。道路もしっかりと舗装されていた。そこから、ここは印パ対立の最前線であるということがわかる。外国人が入れる最も奥のトゥルトックという村まで行った。この村は、パキスタンとの境界まで10kmほどにある。豊かな農村で、畑では麦が栽培され、その周辺には杏の実がたわわにみっていた。そのような最奥の村でも外国人向けのゲストハウスが急増している。このあたりは、



図5 パキスタンとの境界に近いトゥルトック村

バルチ系のムスリムが多数を占め、集落にはモスクがみられた。ゴンパは村はずれの丘の上に小さなものがあるだけであった。

一方、中国との境界地帯に行く際も5,300m以上のチャン・ラという峠をこえる。ここも非対称山稜で、南側は乾燥した急斜面だが、北側は緩やかなU字谷である。レーから4時間ほどで標高4,250mにあるパンゴン・ツォという巨大な湖に到着する。湖岸を南東方向に約1時間進むとメラック村がある。最後の30分は舗装されていない、道とは思えないようなルートで、パキスタン境界地域との差を痛感した。この地域における、中国との緊張はパキスタンとの間ほどではないといことなのだろう。メラックの主要産業は牧畜である。乾燥で樹木が少ないため見通しがよく、背後にそびえる雪山の麓まで牧草地が広がっているのがわかる。

初日にレーに到着するとスマートフォンに「圏外」の表示がついた。市街地の中心でも同様で、



図6 中国との境界に近いメラック村

設定を操作しても同じことである。確認をしたところ、ラダックはジャンムカシミール州に属しており、パキスタンとの紛争地だということで、当局より規制を受けているとのことだった。SIMカードも同様で、ジャンムカシミール州で購入したものは州内でしか使えないようだ。ラダックは平穏なのにもかかわらず、カシミールの名の下で紛争地扱いされてしまうことに対して、住民は不満を持っているようだった。それでも、ホテルなどではWiFiは繋がる(不安定ではあるが)。中途半端感が漂う対応だ。

5. カースト制度

ラダックはインドでありながら、それらしくない地域である。では、カースト制度は見られるのであろうか。地元の人に聞くと、それらしいものはないということだ。やはりチベット仏教の地なのだ。地主と小作の関係はみられず、みな土地を持っているので極端に貧しい農民はいないらしい。

それでも職業に対する差別は、一部で見られるという。低く見られているのは、「ガラー」と呼ばれる鍛冶屋と、「ベダ」「モン」と呼ばれる楽団員たちであるという。そのような例があっても、インドの他の地域と比べて、差別が少ない地域であるといえるだろう。

6. ストック村の暮らし

レーからインダス川をはさんだ対岸にストックという村がある。ストック・カングリという山の麓の扇状地に広がる集落だ。



図7 ストック村の扇頂部

この村で日本人の池田悦子さんとご主人のワンボさんのお宅に、数日間ホームステイをさせていただいた。池田さんは、NEO-LADAKHという旅行代理店も個人で経営しており、さまざまな手配もお願いした。

池田さんの家から20分ほど歩くと、扇頂の谷口である。ここから農業用水がさまざまな方向へ分水されており、扇状地を潤している。相当高度な水管理をしていることがうかがえる。池田さんの家は扇状地の扇頂付近にあるため、比較的きれいな水が使えるとのことだった。

ストックでは、「都会」のレーに比べるとゆったりした時間が流れる。村を歩くと、よく牛に出会う。耕地では麦などが栽培されている。南西斜面に市街地が広がるレーに対して、ストックは北東斜面にあるため日照時間が短く、野菜の栽培などはレーの方が有利だという。村の中の小学校は公立も私立もあるが、格差は大きく私立の方が信頼度は高いらしい。

またこの村はカングリ山の登山道の入口になっており、馬によるキャラバンが登山者の荷物をベースキャンプに運ぶ。キャラバンは村人の重要な現金収入である。私もベースキャンプの途中までトレッキングをしたが、途中の景観が見事であった。地層が褶曲により斜めや縦方向に伸びている。地球の営みを身近に感じることができる場所だった。



図8 褶曲で縦に傾いた地層

新科目「地理総合」とは — 「地理基礎」から考える—

根元 一 幸 (県立座間高等学校)

はじめに

新しい学習指導要領に対する中央教育審議会の答申が、2016(平成28)年12月21日に出され、地理必修化がまた一歩近づいた。答申では、「共通必修科目については、世界史必修を見直し、…(中略)…「歴史総合」と、持続可能な社会づくりを目指し、環境条件と人間の営みとの関わりに着目して現代の地理的な諸課題を考察する「地理総合」を設定すること。選択履修科目については、歴史や地理を発展的に学習する科目として「日本史探究」、「世界史探究」、「地理探究」を設定すること。」¹⁾とあり、科目名は必修の「地理総合」と選択履修の「地理探究」に決まった。

このうち、「地理総合」は、内容的にも手法的

にもこれまでの地理Aと比較して、一新が予想される。改訂の方向性は、図1の通りで、項目立ては以下ようになる。

- (1) 地図と地理情報システムの活用 **GIS**
- (2) 国際理解と国際協力 **グローバル・ESD**
- (3) 防災と持続可能な社会の構築 **防災・ESD**

この3本柱と4つの**キーワード**が骨格となり、科目が構成される。筆者は1年前に、「地理総合(仮称)」の議論の進捗状況を報告すると共に「アクティブ・ラーニング」の視点から課題を述べた²⁾。また、必修化をにらんだ研究発表や³⁾⁴⁾、地理総合を支援するための学会や国土地理院の取り組みも広がりつつある⁵⁾⁶⁾。

「地理総合」は、いったいどのような科目になるのだろうか。具体的な内容の詰めや詳細な

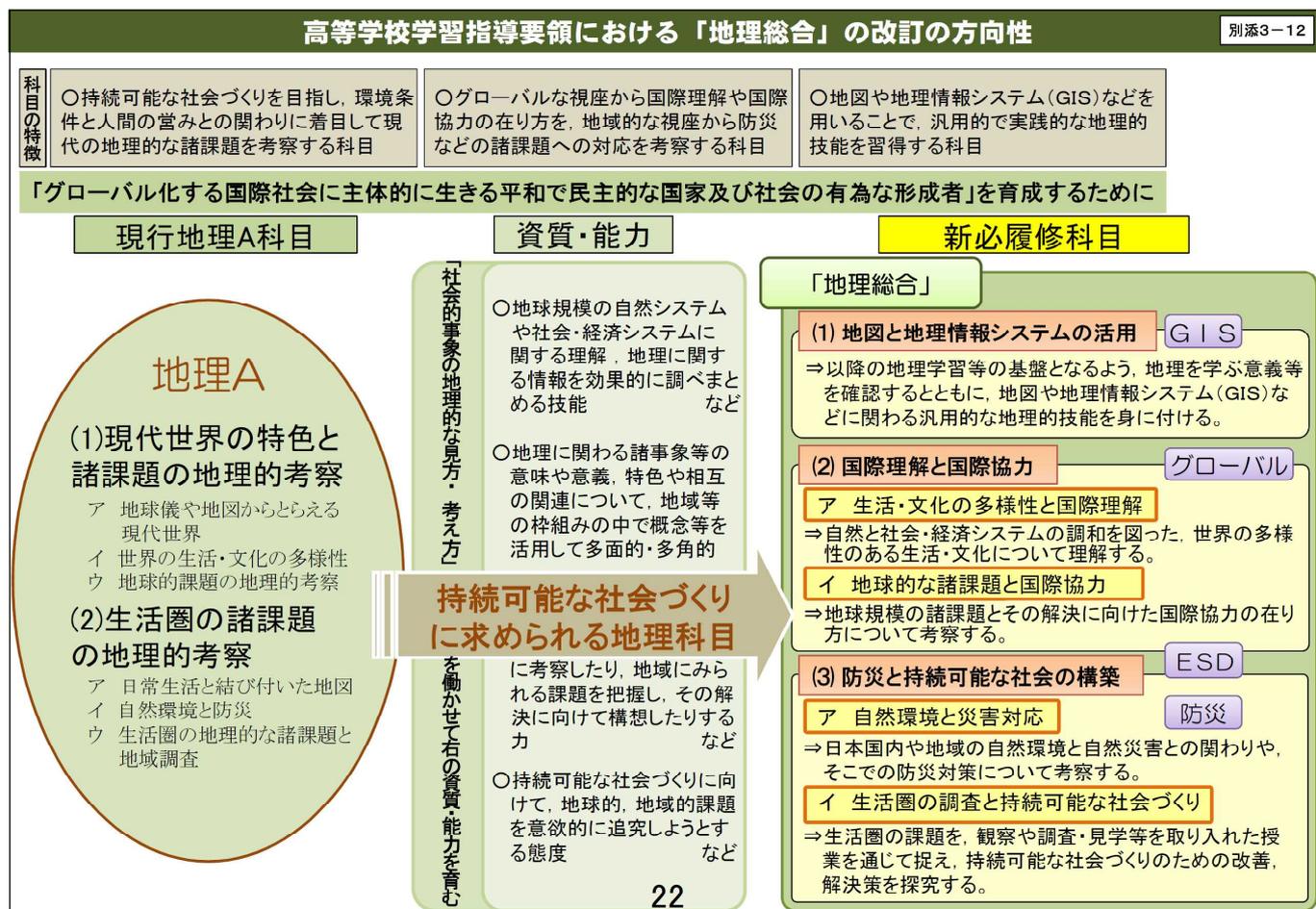


図1 「地理総合」改訂の方向性(中教審答申2016年12月21日別添資料3-12)

項目立てはこれからであろうが、これまでの経緯から、「地理基礎」の取り組みが参考になると思う。本稿では、まず、研究開発学校の取り組みを紹介し、これまでの授業を新たな「地理総合」の発想で組み替えるには、どうすれば良いのかを考えたい。

1. 「地理基礎」の内容と手法

日本学術会議では、『新しい高校地理・歴史教育の創造(2011年)』で、「地理基礎」という名称で地理必修化に向けての提言をしている⁷⁾。また、神戸大学附属中等教育学校は、文部科学省の研究開発学校の指定を受け、2013～2016年度に、「地理基礎」の研究開発を行ってきた。その内容は、身近なところでは、『Guideline』2016年9月号で紹介されている⁸⁾。本稿では、中教審の社会・地理歴史・公民ワーキンググループ資料⁹⁾とともに、神戸大学附属中等教育学校の「地理基礎」の内容と手法を紹介したい。なぜならば、このやり方が、新たな「地理総合」の基本的な考え方になると思われるからである。

神戸大学附属中等教育学校では、「地理基礎」と「歴史基礎」を4年次(高校1年次)の必修科目として置き、「地理基礎」については、図2の単元構成で授業を行っている。ESDに多くの項目を割り、次にグローバル化、そしてGIS・防災という順である。この4つのキーワードは、中教審の答申にも反映されているが、グローバル化は、グローバルに変更されている。

この単元構成を見ると、1年間でこれだけしかやらないのか？という疑問が湧くが、実はこれには仕掛けがある。「歴史総合」を含めて、各単元には、まず始めにその主題に取り組むため

「地理基礎」単元構成 神戸大学附属中等教育学校の例

(1)地球社会が直面する課題		
ア	地球温暖化の現状と対策	[ESD・GIS]
イ	熱帯林の破壊が進んでいる地域の人間の活動	[ESD]
ウ	砂漠化の進行している地域の人間の活動	[ESD]
(2)持続可能な世界の構築		
ア	現地化(ローカル化)の視点とグローバル化	[グローバル化]
イ	地域共同体と持続可能な社会の実現	[グローバル化]
ウ	防災の視点と持続可能な世界の構築	[防災・ESD]

河合塾：Guideline2016.9より

図2

の「問い」が設定されている。そしてこの「問い」を出発点として、各単元で生徒が現代的な諸課題やそれにつながる課題等について主題を設定して探究する学習を行う(参考文献8)p.8というしくみになっている。

神戸大学附属中等教育学校では、これを「主題的相互展開学習」と名付けて授業の組み立てをしている(図3左側参照)。手法としては、設定された主題学習の「問い」に対して、「ロジカルアプローチ」(系統地理的考察)と「リージョナルアプローチ」(地域の事例)を数時間ずつ学ぶという2面的なアプローチをして、最後に「問い」に戻って、課題解決の方策を探るというものである。

『Guideline』には、「なお、「地球的課題」という主題を中心に授業を進めるため、「三角州」「扇状地」といった小地形を集中的に学ぶ単元は設けていません。」(参考文献8)p.10という刺激的なことが書いてある。あくまで、系統地理的な地形、気候、…といった単元は、主題学習

「地理基礎」主題的相互展開学習のイメージ図

神戸大学附属中等教育学校の例 河合塾：Guideline2016.9より

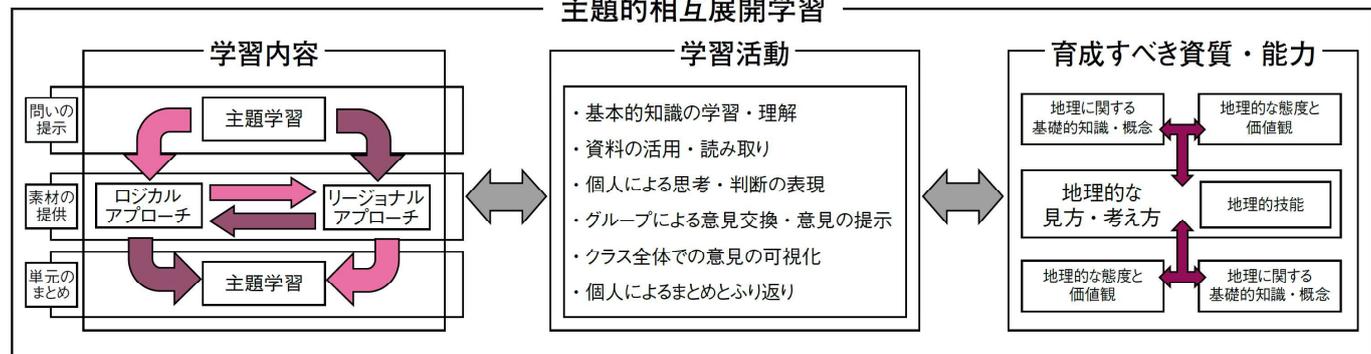


図3

「地理基礎」 単元構成図 神戸大学附属中等教育学校の例

主題学習		ロジカルアプローチ・リージョナルアプローチ	
ア	地球温暖化の現状と対策	ESD・GIS	中心概念 位置と分布、場所
(1) 地球社会が直面する課題	地球環境問題 地球温暖化 地球温暖化の現状はどのようなになっているのだろうか	↔	地図と地理情報システム(GIS)の活用 地球社会はどのように表現されているのだろうか プレートテクトニクスと大地形 なぜ地球は現在のよう姿になったのだろうか 大気の大循環と海洋の大循環 気候の違いはなぜ生まれるのだろうか
	熱帯林の破壊が進んでいる地域の人間の活動	ESD	中心概念 人間と自然環境との相互依存関係
	地球環境問題 熱帯林の破壊 熱帯林などの森林の破壊はなぜ進んでいるのだろうか	↔	ロジカル 熱帯林の分布 熱帯雨林はどこに分布するのだろうか リージョナル 熱帯林の開発～東南アジアを事例に～ なぜ東南アジア諸国で主に信仰されている宗教は違うのだろうか 熱帯林の開発～ブラジルを事例に～ 南アメリカの地域性はどのように生まれたのだろうか なぜブラジルは発展することができたのだろうか
ウ	砂漠化の進行している地域の人間の活動	ESD	中心概念 人間と自然環境との相互依存関係
	地球環境問題 砂漠化の進行 砂漠化はなぜ進んでいるのだろうか	↔	ロジカル 砂漠の分布 砂漠はどこに分布するのだろうか リージョナル 砂漠での生活と開発～西・中央アジアを事例に～ 西・中央アジアの地域性はどのように生まれたのだろうか 石油収入以外にどのような産業があるのだろうか エネルギー問題 限りある資源・エネルギー 資源の枯渇に対してどのような対策が取られているのだろうか
	エネルギー問題 限りある資源・エネルギー 資源の枯渇に対してどのような対策が取られているのだろうか	↔	リージョナル 砂漠での生活と開発～西・中央アジアを事例に～ 西・中央アジアの地域性はどのように生まれたのだろうか 石油収入以外にどのような産業があるのだろうか エネルギー問題 限りある資源・エネルギー 資源の枯渇に対してどのような対策が取られているのだろうか オーストラリアから日本へ運ばれているものは資源だけだろうか
(2) 持続可能な世界の構築	現地化(ローカル化)の視点とグローバル化	グローバル化	中心概念 移動・空間的相互依存作用
	グローバル化 現地化(ローカル化) 日本は世界の諸地域にどのように現地化すれば良いのだろうか	↔	リージョナル 日本の現地化(ローカル化)～南アジアとアフリカを比較して～ 南アジアの地域性はどのように生まれたのだろうか 日本の現地化(ローカル化)～アフリカと南アジアを比較して～ 日系企業はなぜアフリカに進出するのだろうか ロジカル 北アメリカの自然環境～産業と自然環境の結びつきとは～ 人々はどのように厳しい気候を克服したのだろうか リージョナル 日本への現地化(ローカル化)～多国籍企業の世界進出から～ アメリカ合衆国の産業は自然環境とどのように結びついているのだろうか
	グローバル化 現地化(ローカル化) 世界の企業は日本にどのように現地化しているのだろうか	↔	リージョナル 日本への現地化(ローカル化)～多国籍企業の世界進出から～ アメリカ合衆国の産業は自然環境とどのように結びついているのだろうか
イ	地域共同体と持続可能な社会の実現	グローバル化	中心概念 地域
ウ	グローバル化 地域共同体 日本はどの地域と地域共同体をつくれれば良いのだろうか	↔	ロジカル ユーラシア大陸の自然環境～日本とヨーロッパの比較のために～ ユーラシア大陸の東側と西側はなぜ気候が異なるのだろうか リージョナル 日本のこれからと地域共同体～EUの広がり事例として～ ヨーロッパの地域差はどのようにもたらされたのだろうか なぜ日系企業は東ヨーロッパへ進出したのだろうか 日本のこれからと地域共同体～日本と東アジアを事例として～ 日本の領域はどこまでだろうか
	防災の視点と持続可能な世界の構築	防災・ESD	中心概念 人間と自然環境との相互依存関係
	持続可能な世界の構築 災害への備え・対策 持続可能な世界の構築のために何を学び何を身に付ければ良いのだろうか	↔	リージョナル 日本の自然災害～身近な地域を事例として～ 日本の自然環境の特徴から起きる災害にどのように備えれば良いのだろうか 世界の自然災害～自然環境と自然災害の関係から～ 世界の自然災害に対してどのように支援すれば良いのだろうか 身近な地域の自然環境と防災 身近な地域ではどのような自然災害の可能性が高くどのように備えれば良いのだろうか

高木優：研究開発学校制度「地理基礎」「歴史基礎」の開発・実践(2016)より

図 4

を進めるための基礎知識や見方・考え方といった位置づけである。

図4に、神戸大学附属中等教育学校の「地理基礎」単元構成図を掲載した⁹⁾。これを見ると、すべての単元が「ロジカルアプローチ」と「リージョナルアプローチ」の並列ではないことが分かる。また、大地形や気候については、「ロジカルアプローチ」に苦勞してあてはめ、地誌についても「リージョナルアプローチ」にまんべんなく振り分けた工夫が見られる。

ただ、かつての地理にあった、農業・工業といった産業的な発想はまったく見られない。筆者の高校時代の教科書や大学受験問題(特に私学)は、どこで何が取れる的な扱いや出題が多く、これが地理は暗記だと言われるもととなっていたと思う。地名物産の地理が学習指導要領から遠ざかってだいぶ経つが、ことあるごとに、地名物産の地理が舞い戻ろうとする。高校現場の旧態依然とした考え方がそうさせているのかもしれないが、今度こそ、地球と人類のために役立つ地理に生まれ変わりたいものである。

ただ、農業や工業が教科書からまったく無くなるということではないだろう。扱い方として、生産地や生産統計を覚えることではなく、グローバル化が進む経済の中で農業や工業がどのような課題を背負っているのかを主題とすれば良い。これならば、課題解決学習にも適したテーマで、十分新しい「地理総合」でも、定位置を設けることができる。現在の教科書でも、農業・工業の最後には、グローバル化の問題を取り上げている。これからは、こちらを主役にすれば良いのだ。

2. 「地理総合」での進め方の試案

図5は、防災をテーマにしたDIG学習の例である。新学習指導要領では、「アクティブ・ラーニング」の代表的な事例としてあてはまるだろう。

防災の項目での、従来の授業展開では、簡単にいうと次の通りである。

①DIG作業

ワークシート(図5)を配付し、各4人10グループで、大地震に遭遇した時の行動についての課題に取り組ませる。この時、別のプレゼンテーションシートで、田老のイラストマ

ップや鳥瞰写真を見せ、防潮堤(図5中赤太線部)の存在を提示する。

②結果の共有

グループごとの課題の結果をクラス単位でまとめ、田老地区の津波被害を入れた地形図に、行動ルートと×を入れた授業用シート(図6)を用意する。これをプリントして配付するとともに、スクリーンに提示して、各グループでプレゼンテーションをさせる。内容は、どのような判断で、どこを通過してどこに逃げたかである。その後、地形図を見ながら、問題点を意見として出し合い、結果を共有する。

図6からは、防潮堤に逃げたグループは無かったものの、近くの大きな学校のグラウンドに避難して津波に遭遇した可能性や、高い所に逃げるにしても、地形図をまったく無視して、道なき斜面を登ろうとする行動が読み取れる。

さて、この授業を核に、新しい「地理総合」の授業展開として、組み替えるにはどうしたら良いのだろうか。前述の「地理基礎」の例にあてはめて考えてみよう。

①「問い」の提示＝主題学習

「あなたが大地震に遭遇した時、地震から身を守るために、どのような行動をとるべきだろうか。」

主題は、地震全体を扱うために、大きく設定する。その中で、具体的な例として、図5の内容を提示する。

②素材の提供＝「ロジカルアプローチ」

「どのようにして地震が起こるのだろう。また、地震にはどのようなタイプがあるだろう。」

地震がどのようにして発生するのかについて、インターネットなどを活用して情報を収集し、地震をメカニズム的に捉えさせ、プレート境界型・活断層型の発生のおくみと揺れの特徴や範囲、津波の有無などを比較させる。結果を、共通性と異質性に整理してまとめさせる。

もっと大項目として扱うのならば、プレートテクトニクスの内容を含めても良いだろう。

③素材の提供＝「リージョナルアプローチ」

「代表的な地震とその被害には、どのよう

大地震が起こったら どうする？

課題：あなたたちが右の地形図上の交番付近にいた時，立ってられない程の強い地震が発生しました。揺れがおさまった後，どのような行動をとりますか？グループで話し合ってみましょう。

行動経路を**赤線**で，行動後の位置を**×**で記入しましょう。

1:25,000地形図「田老」より

図5 DIGのワークシート(部分)

④災害から身を守るために

人間が自然災害とどう向き合うか？

田老地区の被害：防潮堤破堤
↓死者161人 家屋流出435戸

1 **防潮堤の過信**
津波は2 **防げない**

↓ ではどうする？

津波避難の原則

- ・防災施設を3 **過信しない**
- ・4 **ハザードマップ**の活用
- ・近くて5 **高い所へ**

自然災害との向き合い方
防災から6 減災へ！

図3.11津波被害(Xは各グループの行動後の位置)

図6 ワークの結果を入れた授業用シート(部分)

なものがあるだろう。」

世界で起こった代表的な地震について、インターネットなどを活用して情報を収集し、地域性に着目しながらメカニズム的に分類させる。具体例として、東北地方太平洋沖地震と兵庫県南部地震(または発生間もない活断層型地震)に着目して、東日本大震災と阪神・淡路大震災の被害の状況や被害の直接的な原因を比較させる。結果を、共通性と異質性に整理してまとめさせる。

この②③は当然ICTの活用が前提である。各グループには、通信環境の整ったタブレットが用意され、これを活用して情報収集する。タブレットと授業PCのスクリーンとで画面が共有できることが望ましい。

④単元のまとめ＝主題学習

「ロジカルアプローチ」と「リージョナルアプローチ」の学習をもとに、「問い」に戻って、大地震に遭遇した時、地震から身を守るために、どのような行動をとるべきだろうかを考えさせる。図5の田老のDIGでは、まず、各グループの行動についてのプレゼンテーションをさせる。その後、地形図を見ながら、問題点を意見として出し合い、結果を共有する。

その結果としては、プレート境界型、特に海溝型の地震であることを判断し、想定される津波から身を守るために、速やかに身近な高台に安全そうな経路で避難行動をとるべきであるという結論を共有できる。

一方、もし活断層型の地震で、都市部で遭遇した時は、建物の倒壊以外に火災の危険性が高いので、これから身を守る行動を取るべきであるということになる。

最後に、被害を少なくするために、「防災」と「減災」をキーワードに知恵を出し合いこの単元を終了する。

おわりに

最後に、「地理総合」の実施に向けて、いくつかの課題を提示したい。

①教科書のあり方

かつての教科書では、図版が並び、本文は説明調で記述され、図版と本文はつながりがないという時代があった。これは、大学の教授陣な

どの執筆者と図版を集める編集者の連携がうまくとれておらず、時間的制約もあってバラバラのまま出版というお家の事情であった。この点は、だいぶ改善が進み、現在では、図版と本文がリンクするようになってきた。さらに筆者は、以前から、教科書の各項目の始めに課題を置き、図版などを読み解いてその課題を解決し、それを本文の説明で確認するという、教科書の構成を唱えてきた。そして、その考えは現在の教科書でも、ある程度は取り入れられている。

これからは、もっと大きな単元で、主題を設定し、それを解決するための糸口として、各項目が並び、その各項目にも、小さな主題が設定されるという教科書や授業の構成になると考えられる。

また、「ティーチング」から「ラーニング」にかわるため、これまで以上に情報収集や地図表現などのスキルが求められるようになり、これらのページの充実も必要となる。考えてみれば、従来の教科書に載っている地域調査の手法そのものが、今回の「地理総合」や、広く見れば他教科を含めた「アクティブ・ラーニング」の手法として、そのまま活用できるのではないか。

②大学入試との関係

高校現場では、大学入試を意識すると、「ティーチング」が主体となり、「ラーニング」の授業が展開しにくいという考え方がある。覚えさせる内容が多いためという理由だ。

しかし、大学入試センター試験の地理では、暗記の出題はほとんど無く、しくみで理解し、知識をつなげて解く問題が多い。この点からも、物事を構造的にとらえる力が求められており、「地理総合」の考え方と相反しない。私立大学の入試問題も、細かな知識を突く暗記型の出題でなく、地理的な見方・考え方を問う問題に変わっていけば、「ラーニング」は大学入試とも共存できるであろう。

③施設・設備の課題

「地理総合」の実施には、ICT環境の整備が必須である。私立高校では、すべての教室にプロジェクターや電子黒板を配備、多くのノートPCやタブレットを整備している学校もあるようだ。一方、県立高校の普通科では、コンピュータ教室が1つとタブレット型PCが9台というところが現状であろうか。新学習指導要領

が始まった時、各教科・科目でICTが活用されるとすると、全く足りない状況である。

「地理総合」の実施でも、授業用PC・プロジェクターと最低各グループに1台通信環境の整ったノートPCやタブレットが必要になる。できれば、教員機と生徒機がリンクしていて、生徒機画面をスクリーンに提示できることが望ましい。ただ、各科目すべてにこの施設・設備を整えるのは、財政的に難しい話だろう。

理想は、1人1台のタブレットであるが、それが無理となると、BYOD(Bring Your Own Device=私物端末を持ち込んで使用すること)の発想で、多くの生徒が持っているスマートフォンをグループ学習で補助的に利用することが考えられる。これは、現実的であるが、厳密に言えば、デジタルデバイドや通信料の個人負担の問題がある。

④教員側の課題

世代交代が進み若手が増えて、ICTにも前向きな教員が増えている。環境さえ整えば、積極的に活用してもらえそうである。ただ、地理必修化という視点からは、地理を専門としない教員が「地理総合」を担当する可能性が増加する。GISなど地理の中でも特化した分野になると、概念はともかく、ICTのツールを使いこなせるかという課題が出てくる。

GIS自体は、スマートフォンなどで普段から無意識に使っているものである。この操作性の良さなどを生かして、ICT初心者でも扱えるような、簡単で操作性に優れたICTツールの開発が急務である。

また、ICTや「アクティブ・ラーニング」を教育現場で実行できる教員の創出が必要である。大学の教科教育法など教員養成の場面でも、これからの教育、「ティーチング」でなく「ラーニング」に対応できる教員養成の体制が急務となる。なぜならば、彼らが新採用教員になる頃に新学習指導要領がスタートするからである。

現段階で、得られる情報をもとに、新科目「地理総合」がどうなるのかを考えてきた。2022年の実施までは、まだ少し時間があるが、持続可能な社会を構築をめざす「地理総合」の準備が進められることを期待する。

参考文献

- 1) 中央教育審議会 (2016) : 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) 2016年12月
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- 2) 根元一幸 (2016) : 新科目「地理総合」とアクティブ・ラーニング. 地理紀要第33号PP. 16-20. 神奈川県高等学校教科研究会社会科部会地理分科会.
- 3) 山内洋美 (2016) : 高校世界地誌授業における課題—必修となる地理総合を視野に— 2016年度日本地理学会秋季学術大会発表要旨
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2016a/0/2016a_100160/_pdf
- 4) 河合豊明 (2016) : 「地理総合 (仮称)」を見据えた教科横断型授業の実践～BYOD環境下におけるGISの活用例として～ 2016年度日本地理学会秋季学術大会発表要旨
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2016a/0/2016a_100086/_pdf
- 5) 日本学術会議公開シンポジウム (2016) : 「高等学校地理総合 (仮称) 必修化による地理教育への社会的期待と課題—現場の地理歴史科教員を支援するために日本学術会議は何ができるか—」 2016年12月4日日本学術会議講堂
- 6) 国土地理院 (2016) : 地理教育の支援に向けた課題の整理と具体的取組への提言～国土の豊かな恵みを次の世代に引き継ぐために～ (案)
<http://www.gsi.go.jp/common/000141445.pdf>
- 7) 日本学術会議 (2011) : 新しい高校地理・歴史教育の創造—グローバル化に対応した時空間認識の育成— <http://www.geoedu.jp/GK.pdf>
- 8) 河合塾 (2016) : 特集学習指導要領改訂と高大接続改革より新設科目の特徴 Guideline2016年9月
<http://www.keinet.ne.jp/gl/16/09/01toku.pdf>
- 9) 高木優 (2016) : 研究開発学校制度「地理基礎」「歴史基礎」の開発・実践. 中教審社会・地理歴史・公民ワーキンググループ2016年1月25日資料5
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo03/071/siryu/_icsFiles/afieldfile/2016/02/15/136692_5_3.pdf

宮城・震災復興の現状と課題

齋藤 兆生 (県立希望ヶ丘高等学校・定時制)

はじめに

2016年度の夏季野外調査は、8月17日(水)～19日(金)に行われた。今回は、宮城県をフィールドとして、2011年の東日本大震災で大きな津波被害を受けた宮城県太平洋沿岸地域の津波被害からの復興状況の視察と、女川原子力発電所PRセンター訪問、古代の東北地方太平洋沿岸地域の歴史について見識を深めることを目的として行われた。被災地に赴くということもあり、様々な専門分野の教員12名が参加し、充実した野外調査となった。

行程は次の通りである。

17日 伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター(栗原市)、さんさん商店街・防災庁舎跡(南三陸町)

18日 釣石神社・旧大川小学校・日和山・旧門脇小学校(石巻市)、東北電力女川原子力発電所PRセンター(女川町)

19日 仙台塩釜港・魚市場、東北歴史博物館・多賀城跡(多賀城市)

1. 伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター

初日はあいにくの雨模様であった。くりこま高原駅に集合し、バスにて最初の目的地・伊豆沼内沼サンクチュアリセンターへ向かう。伊豆沼・内沼は県内最大の自然湖沼で、ガンやカモ、ハクチョウ類の貴重な越冬場所であることから、ラムサール条約の登録湿地となっている。今回は様々なグラフィックや標本の趣向を凝らした展示がされている鳥館を見学した。伊豆沼・内沼の歴史や人と自然とのかかわりを学ぶことができた。

2. さんさん商店街～南三陸町防災庁舎跡

その後、本来予定されていたひころの里へ向かうが、臨時休館ということで、予定を変更してそのまま南三陸さんさん商店街へ向かう。

南三陸町は宮城県の北東部に位置し、リアス式海岸特有の美しい景観を持つ。沿岸部一帯は三陸復興国立公園の指定を受けている。リアス式海岸の地形的な特性から津波の影響を受けやすく、古来、幾度も地震による大津波の被害を

受け、「地震の後には津波」という意識を持ち、津波に備えてきた。それにも関わらず、東日本大震災における津波で大きな被害を受け、死者数は566名、行方不明者数も310名にのぼるといふ。沿岸部に建てられていた南三陸町防災対策庁舎では、津波の襲来時、最後まで防災無線で住民に避難を呼びかけ続けた。大津波は庁舎の屋上を2mも上回り、職員二十数人が津波に流された。町の全職員の2割に相当し、これから町を担う30代の中堅職員や、10～20代の若手職員が含まれる。



図1 防災庁舎跡

震災当時、赤い鉄骨だけの無残な姿となった防災庁舎はテレビで何度も放送されたので、大変印象に残っていた。復興庁舎を残すかどうか、いろいろ議論があったそうだが、残すという方向で決着し、現在は周辺に盛り土の工事が行われており、少し離れたところから見ることができた。仮設の慰霊台にて手を合わせ、犠牲となった方々のご冥福をお祈りした。自然の持つ大きな力、そして犠牲の大きさに、心が痛んだ。

南三陸町は大津波によって壊滅的な被害を受けた。南三陸さんさん商店街は津波で流された集落の跡地に開設された仮設の商店街である。お盆の直後であり閉まっているお店も多かったが、私は営業していた地元の特産品などを扱っている店に入り、モアイ像グッズを購入した。かつて、1960年のチリ地震の際、津波に見舞わ

れたイースター島と旧志津川町。1991年、復興と絆の証としてはるか遠くチリから旧志津川町にモアイ像がやって来たとのこと。2011年3月11日の大津波によりモアイ像は流出してしまったが、震災から2年後の2013年、新しいモアイ像がイースター島から贈られたという。モアイは現地語のラパ・ヌイ語で「未来に生きる」を意味し、モアイ像には未来を見守り、明るく導く力があるとのこと、まさに復興のシンボル。遠く離れた南太平洋の孤島イースター島と南三陸町との不思議な絆に思いを馳せた。



図2 さんさん商店街

その後、やはり震災でいったん廃業したが、広島に避難していたご主人が復興の思いを胸に再建・再開した旅館へと向かった。地元の食材を使った料理は大変おいしく、楽しいひとときを過ごした。

3. 釣石神社

2日目は、石巻市へ。まず、石巻のパワースポットとして有名な釣石神社へ。釣石神社は学業・知恵の神とされる天児屋根命(あめのこやねのみこと)を祀る神社で、落ちそうで落ちない巨岩があることで知られる。度重なる災害にも落ちずに耐え、東日本大震災にも耐えたことから、受験や就職の際の「落ちない」(＝合格)ご利益にあやかろうという参拝者が多いという。ご利益は受験だけにとどまらず「夫婦円満」「縁結び」「子宝」「豊漁」「長寿」と盛りだくさんである。

階段を上り、本殿へ。古の信仰の空気が感じられた。周囲が14mもあるというご神体の巨岩は大変迫力があり、まさに「落ちそうで落ちない」。とても不思議で、神秘的だと感じた。



図3 釣石神社

4. 大川小学校

続いて、大川小学校へ。大川小学校は石巻市釜谷地区の北上川河口から約4kmの川沿いに位置していた。東日本大震災で全校児童108人の7割に当たる74人が死亡・行方不明となった。学校の管理下にある子どもが犠牲になって事件事故としては、戦後最悪であるという。

小雨が降る中、大川小学校を見学。震災前はモダンで立派であったであろう校舎は津波でぼろぼろに破壊され、その無残な姿をさらしていた。かつて校庭であった場所には慰霊碑が建てられ、犠牲になった子どもたちや近隣の住人の名前が刻まれていた。静かに手を合わせ、冥福を祈った。脇には、在りし日の大川小学校と児童たちの写真が置かれており、震災によって命を絶たれてしまった子どもたちのことを思い、胸が痛んだ。



図4 大川小学校

5. 石巻市市街被災地(日和山・旧門脇小学校)

昼食を漁港近くのお店で食べ、石巻市街地へ。まず、旧門脇小学校を見学。中へは入れなかったので、バスを降りて、外から見学した。ガイドさんの話によると、先程の大川小学校とは対照的に、門脇小学校では校長の指揮の下、下校した一部の児童を除く約275人を誘導し、高台の日和山公園に避難させ、学校に残っていた児童からは一人の犠牲者も出さずに済んだという。津波が到達して学校は破壊され、火事も起きて全焼した。校長の的確な判断がなかったら、どんなことになっていただろうかと思うと、学校を持つ責任の大きさに気が引き締まった。

その後、日和山公園へ。日和山は旧門脇小学校のすぐ裏手にあり、津波の被害を免れて、多くの人々が避難した。山の下在市街地が壊滅したのとは対照的に、日和山には震災前からの街並みが残る。日和山公園からは石巻市街地が一望でき、震災時、津波がどこまで到達したのか、当時どのような様子だったのか、ガイドさんからお話をうかがった。旧北上川の中瀬に建つ石ノ巻萬画館の話など、大変興味深かった。



図5 門脇小学校

6. 女川原発PRセンター

次の目的地・女川原発PRセンターでは、原発の耐震性の高さ、安全性などに関する説明を受け、展示を見学した。本来ならば女川原発そのものを見学したいところだが、それは無理とのことで、PRセンターを見学することになったとのこと。大事故を起こした福島第一原発と異なり、沿岸に位置する女川原発がなぜ被害を出さなかったのか、その設計段階からの徹底したリサーチや津波想定など、最悪を想定した設計が功を奏したのだということを知ることができた。



図6 女川原発PRセンター

原発そのものに対する賛否は別にして、安全第一のその設計思想は、東京電力とは全く違うと感じた。もしも東京電力が東北電力と同様に謙虚に自然災害への備えをしていたら、あのような大事故にはならなかったのではと思うと、やるせない思いになった。

その後、仙台へ。2日目の宿、仙台ガーデンパレスに向かった。

7. 塩釜港・魚市場

2日目の昼過ぎから少しずつ天気は回復していたが、最終日となる3日目は完全に晴天となった。まず、塩釜港・魚市場へ。魚市場の方に、中を案内していただいた。魚市場であるが、後継者不足から、年々店の廃業が出ているという。独特の制度から、新規参入が難しく、今営業している店の後継者がいなければ、店は廃業するしかないとのことだった。また、魚市場で取引されている魚のほとんどは、塩釜港で水揚げされたものではなく、外部からのものだということにもびっくりした。

各自で魚市場内や港、周囲の地域を散策し、昼食を食べて、再集合。次の目的地、東北歴史博物館へ向かった。



図7 塩釜港魚市場

8. 東北歴史博物館・多賀城跡

旅の最終目的地、東北歴史博物館と多賀城跡。多賀城はヤマト王権の東北侵略・支配の拠点であり、古代においては東北地方における朝廷の出先機関として機能していた。地歴科教員として、多賀城はいつかは訪れたい史跡であり、今回の史跡踏査でも大いに楽しみにしていた場所である。

まず東北歴史博物館を見学。館内は東北地方の歴史が時代順に展示されており、蝦夷と多賀城を取り上げた古代のブース、縄文文化が栄えたころの東北を取り上げた縄文時代の様子などが特に印象に残った。

その後、いよいよ多賀城跡へ。よく整備され、なぜこの地が選ばれたのかということも、地形からうかがい知ることができ、写真だけではわからないことがあることを改めて実感した。中心部の政庁跡を中心に見て回ったが、その周辺部を含めた当時の広さは約74万平方メートルもあったとのことで、当時の規模に思いを巡らせながら見学した。



図8 多賀城跡

おわりに

今回の野外調査で最も印象に残ったもの。それは防災庁舎と大川小学校である。いまでは廃墟と化したその姿から、自然の猛威のおそろしさを実感させられると同時に、震災で亡くなった多くの人々・子どもたちのことを思い、この教訓を後世に語り継いでいくことの大切さを痛感した。

個人的には、3.11から5年以上もの月日が流れ、ようやく被災地を訪問できたことは、たいへん感慨深い。同時に、私たちのように被災地から遠く離れた地域に暮らす者にとっては、どこか実感として感じられないことも否めない事

実である。2日間私たちのガイドをしてくださった語り部の後藤さんは、ご自身が津波に遭遇し、九死に一生を得られた方で、その生々しい体験を聞くことができたことは、大変貴重な経験であった。

今回の野外調査で見聞きしたことや感じたことを生徒に伝えられるよう、また震災復興に少しでも貢献できるよう、心掛けていきたい。そして、今後どのように町や人々の生活が変化していくのか、見続けていきたいと思う。

末筆ではありますが、今回の野外調査を企画・運営してくださいました地理分科会の先生方に、厚く御礼申し上げます。初参加でしたが、様々な学校でご活躍されている先生方と一緒にできて、大いに勉強になりました。本当にありがとうございました。

以上を、夏季野外調査の報告とさせていただきます。

身近な地域の教材化 ―地域研究委員会夏季新横浜巡検―

井上達也（県立鶴嶺高等学校）

はじめに

私が新羽高校に勤務していたのは1993年4月から2003年3月までの10年間。1993年3月に横浜市営地下鉄が、新横浜からあざみ野まで延伸した翌月に赴任し、新羽高校の最寄り駅である北新横浜駅（開設当初は新横浜北）周辺の変化を見守ってきた。

私がいた10年間で、特に新横浜駅周辺の変化はめまぐるしかった。バブル経済崩壊後の時期ではあったが、新しいオフィスビルが続々と増え、赴任前の1989年に横浜アリーナが、1990年には新横浜スケートセンター、1991年には横浜労災病院、1992年には横浜ラポール（障がい者のためのスポーツ施設）と新横浜プリンスホテルが相次いで開業した。またラーメン博物館がオープンしたのは赴任後の1994年のことで、現在のラーメンブームの先駆けとなった。

新羽高校の鶴見川対岸に横浜国際総合競技場（日産スタジアム）の建設が始まったのは1994年、その後1997年にスタジアムは完成、1998年に神奈川ゆめ国体の開催、この年は横浜高校が甲子園春夏連覇、さらに横浜ベイスターズが日本シリーズで優勝した年でもあった。そして2002年にはFIFAワールドカップが開催され、1回戦のあった日に混乱を避けるため、午後の授業を休講にしたのは懐かしい思い出である。



図1 2001年当時の北新横浜駅前

一方北新横浜駅前であるが、地下鉄開業当初は店一軒なく、空き地、畑、中小の工場があるのみ。何とも殺風景な光景であった。10年の間にコンビニエンスストアができたものの、大きな変化はなかったが、逆に転勤してからのこの

14年の間に駅前にはショッピング施設やレストラン、結婚式場、高齢者向けの施設が建設され、風景は一変した。

今回に巡検では、北新横浜駅に集合し、横浜市営地下鉄の新羽車両基地、北新横浜駅周辺、新横浜駅周辺を巡り、ラーメン博物館内で昼食、その後鶴見川多目的遊水池事業の状況を見学の後、横浜ラポール会議室にて巡検の反省を行い解散した。



図2 現在の北新横浜駅前

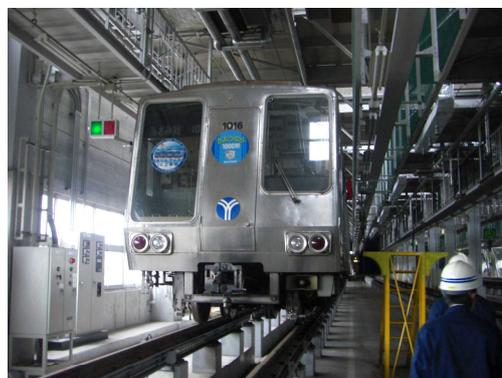


図3 横浜市営地下鉄新羽車両基地
現在は使われていない1000系の車両が保存されている

1. 新羽車両基地

はじめに、横浜市営地下鉄ブルーラインの新羽車両基地に向かった。ここは、地域研究委員会で2002年冬に一度で見学したことがあり、14年ぶりの再訪となった。

到着後すぐに、交通局の職員から、市営地下鉄ブルーラインや車両基地についての説明を伺った。ブルーラインは営業距離が40.4キロと長

く、さらに小田急線新百合ヶ丘まで延伸計画があるということ。また、事故対応や保線に関しては、関内駅を起点にあざみ野までを新羽車両基地が、湘南台までを上永谷の車両基地が担当しているという話。給電に関しては一般的なパンタグラフではなく、車両側面の給電用の軌道から電気を供給する、第三軌条方式を採用しており、他の私鉄には乗り入れできないといった話。また、これ以外にも市営地下鉄独特の技術が数多く用いられ、「ガラパゴス化」しているとのこと。



図4 地下鉄の給電部(オレンジの部分)

私が最も興味深かったのは、2007年ワンマン化に伴いホーム扉を全駅に設置して以来人身事故がなくなったという点。昨年東京メトロで痛ましい転落死亡事故があり、さらに、私が普段使うJR東海道線では、毎週のように人身事故が発生しており、鉄道会社各社は早急にホームドアを設置すべきであると感じた。

その後、約1時間にわたり、車両基地内を見学した。当日は磯子工業高校の生徒がインターンシップできていて、彼らとともに構内を巡った。

この車両基地の機能は、大きく二つに分けられる。一つは車両の修理・点検と、もう一つが線路などの保安管理の面である。以前来たときには、車両の待機場所には多数の車両が並び壮観な感じだったが、今回は旧式の1000系が保存されているのみであった。現在これらの機能は主に上永谷の車両基地が行っているとのこと。

保線車両については、停電でも動けるようガソリンエンジンを使った車両が用いられ、緊急時に備えていた。なお、私が普段利用する吉野町駅とその周辺では、塩分を含んだ地下水がしみ出るため、本来は10年以上持つはずの線路が、2年程度で交換が必要とのこと。利用客の安全

確保のため日々作業が行われていることがわかった。



図5 線路保線用の車両

見学の最後には、大きな車両基地の屋上部分に上るといふ貴重な体験をさせていただいた。なお、屋上については、現在有効利用を図るため、アイデアならびに事業者を公募している状況である。



図6 広大な屋上部分と新横浜方面の風景



図7 手前のパイロンは県警白バイの練習用奥の機材は相鉄線日吉延伸用の機材

2. 北新横浜駅周辺の工場・果樹園

1996年発行された「新・神奈川県地理」の18ページには、港北区の新吉田から新羽にかけ

て農家がプレハブなどの貸し工場を大量に造り、東京や川崎市から機械金属系の中小企業が移転してきたという記載がある。北新横浜駅北側には、当時作られた工場が現在も残る。ただし、当初移転してきた企業はほとんどなく、新たに建設関係や自動車関係の企業が見られる。今回はざっと巡っただけなので、業種等の詳細は、いずれ機会があれば確かめてみたい。また工場の間には、ハマ梨で知られる和梨や、ブドウの果樹園がある。収穫された果樹は主に直売で販売されているようだ。

新羽高校に至る通学路周辺は、市街化調整区域に指定され、現在でも畑地が多く都会における貴重な緑地となっている。

一方南側には、大規模なショッピング施設エスポートが2004年にオープン。以降商業施設が合い次いで建設されたのは、前述の通り。最近ではマンションも建ち並ならび、さらに高齢者向けの施設・住宅も目立つ。



図8 1970年代に農家によって建てられたプレハブ工場

3. 新横浜ラーメン博物館

昼食は、ラーメン博物館でそれぞれ摂った。今回の参加者の中で、ラーメン博物館に初めて来たという人がけっこういて少し驚いたが、しかし、よほどのラーメン好きでない限り、確かにわざわざ休日をつぶして来ることはないかもしれない。

現在日本は第何次かのラーメンブームとも言われ、幾多のラーメン店が誕生しては消えている。2004年にオープンしたラーメン博物館は、当初より地方のラーメン店を招き出店させてきた。そして、この博物館を訪れる人に「ご当地ラーメン」を提供し、またテレビなどで取り上

げられることで、地方の味を全国に知らしめた。世はラーメン以外にも、B級グルメ、ご当地○○ブームでもあるが、その先駆けとなった施設であることは間違いのないと思う。

なお、当日は夏休み中と言うこともあって、台湾をはじめとする外国人観光客の姿も数多く見られた。



図9 昭和レトロな雰囲気のレストラン内部

4. 鶴見川遊水池事業

1989年に刊行された「神奈川の川」の鶴見川の中に、「水害招いた盛り土」という項があり、1960年代後半に横浜線沿線(鶴見川流域)に進出してきた企業が、水害を防ぐため競って高い盛り土の上に工場を建てたこと、そして水田だった場所が結果的に遊水池の機能を失い、下流でより多くの洪水が発生したことが描かれている。また、小机近辺に多目的遊水池が計画されていると報じている。



図10 鶴見川多目的遊水池事業(京浜河川事務所HPより)

今回訪ねた横浜国際総合競技場と横浜ラポールは、まさにこの鶴見川多目的遊水池内にある建物である。どちらの建物も高床式のような構造になっており、1階、あるいは地階部分の駐

車スペースは貯水池としての役割がある。実際、台風シーズンには何度か浸水し、下流の水害を未然に防いでいる。

流域の都市開発、工場進出によって昭和40年代鶴見川はたびたび水害に見舞われた。1級河川である鶴見川の治水対策は国によって計画が策定された。1984年から事業を開始し、1,700億円の事業費を投入し約20年の歳月をかけ2003年に暫定的であるが事業は完成した。私が新羽高校に勤務していた10年間は、まさにこの工事の最中で、大型の建設機械が地面を掘り下げ、ダンプカーが行き交う様子が、教室の窓から毎日のように見られた。なお、大量の土砂(残土)は南本牧まで鶴見川を船で運ばれ、今日の南本牧埠頭の埋立てに用いられた。



図11 新横浜から見た横浜国際総合競技場
(2005年撮影)

5. 相鉄線の延伸計画

以下の文章は相模鉄道のHPからの引用である。

「相鉄・JR直通線は、相鉄線西谷駅とJR東海道貨物線横浜羽沢駅付近間に連絡線(約2.7km)を新設し、この連絡線を利用して相鉄線とJR線が相互直通運転を行うものです。また、相鉄・東急直通線は、JR東海道貨物線横浜羽沢駅付近と東急東横線・目黒線日吉駅間に連絡線(約10.0km)を新設し、この連絡線を利用して相鉄線と東急線が相互直通運転を行うものです。」

なお、相鉄・JR直通線は2年後の2019年度下期(2020年)完成予定、また相鉄・東急直通線は2022年度下期(2023年)の完成予定である。この二つの直通が実現すると、相鉄沿線から、東京都心や新横浜へのアクセス時間が格段に短縮する。

今回の巡検では、相鉄線の工事の様子を直接見るができなかったが、地上から今後の展望について考察した。新横浜付近は今後副都心としても、交通の結節点としてもますます発展する可能性を秘めている。



図12 相鉄・東急直通線新横浜駅工事を知らせる案内板

おわりに

現在は茅ヶ崎市内の鶴嶺高校に勤務するが、この学校は教員人生で5校目の勤務校である。転勤のたびに、地域研究の対象とする地域を変えてきた。だが、新横浜周辺は10年通いつけていた地域なので、とりわけ思い入れもあり、情報を収集しているもりではあったが、実際に今回訪ねると初めて知る事実も多く、改めて巡検の重要性を認識した。

1981年、私が教員になる以前地理部会の大先輩によって「現代の神奈川」(清水書院)が刊行された。この本は、神奈川県内全域を、実際に巡検をするためのガイドブックで、地図、コース、主な見所・内容から構成されていた。今回、新横浜を巡り、また最近の地域研究委員会のミニ巡検などを通じ、全県の地理担当の教員がそれぞれ、勤務校や居住地をベースに半日程度の巡検コースを作成し、持ち寄りデータベース化するのもよいと感じた。冊子やCDでは無く、もっと気楽にブログやフェイスブックのようなものでかまわないので。そう言えば、「新神奈川県地理」を作るとき、併せて「神奈川の居酒屋」のような本も作れるという話も冗談で出たこともあったが、そのくらい気楽な感じで情報を共有できればと思う。

知っているようで、知らない身近な地域。正確で客観的な地理情報の共有を、今後図っていければと思う。

横浜市関内地区の巡検 ー地域研究委員会冬季巡検ー

中 島 功 (県立有馬高等学校)

2016年12月26日(月)、J R 関内駅北口に朝 9 時30分に集合し、横浜市中心部関内地区の巡検を行った。当日の行程は次のとおりで、全行程徒歩で移動した。

関内駅北口⇒馬車道周辺⇒大棧橋⇒横浜開港資料館⇒中華街・元町⇒寿町・中村町～横浜橋商店街⇒南公会堂

1858(安政5)年に結ばれた日米修好通商条約では、開港場は神奈川と決められた。しかし、江戸幕府は東海道沿いの神奈川を避けて小漁村の横浜を1859(安政6)年に開港した。

イセザキモールの関内側入口前に吉田橋がある。吉田橋は吉田新田(のちの市街地)と開港場を結ぶ橋で、1859年に架けられた。川や掘割によって長崎の出島のように隔離された開港場を管理するため、1861(文久元)年ここに吉田橋関門(関所)が設けられた。それ以来、関門の内側(居留地側)を「関内」、外側(伊勢佐木町側)を「関外」と呼ぶようになった。1869(明治2)年に吉田橋はイギリス人技師ブラントンの設計により橋長24m・幅員6mのわが国最初の橋脚のないトラス鉄橋として架け替えられ、「かねの橋」として庶民に親しまれるとともに、文明開化のシンボルとなった。現在、橋の下の河床は高速道路になっている(図1)。



図1 吉田橋関門跡と「鉄の橋」

開港にあたって整備された開港場は、大岡川の河口、砂州の上にある横浜村の内海(中村川の河口部分)、さらに新たに山手側の砂州の根元を開削した堀川によって1860(万延元)年に市街地から分離され、開港場内に横浜居留地が設定され、外国人の生活の場が制限された。横浜村の

人々を本村(元町)に移転させ、波止場の直前の神奈川運上所(県庁本庁舎付近)を境に、西側を日本人居住地、東側を外国人居留地とした。

吉田橋から北東に向かう通りが馬車道である。この通りは文字通り馬車の通る道として、居留地の外国人の要求により1867(慶応3)年3月につくられた。馬車は開港直後に日本にはいり、外国人専用の乗物であったが、1867年秋には茶や絹などの貿易を行っていたコブ商会によって乗合馬車として企業化された。乗合馬車が日本人によって営業されたのは1869(明治2)年5月で、日本写真業の祖のひとりといわれる下岡連杖(久之助)らのつくった成駒屋によってである。その後これらの乗合馬車は互いにスピードアップや増便を行って競争したが、1872年の鉄道開通、また人力車の普及によって経営不振になっていった。現在、馬車道にはガス灯が設置され、ガス灯や街路樹・アイスクリーム・写真など「日本最初」に関係する碑が設置されている(図2)。



図2 馬車道の風景

旧日本人居住地であった区域には、堅固な石造りの明治期の建造物が残されている。旧横浜正金銀行本店本館（現在は県立歴史博物館）はその代表で、国の重要文化財に指定されている。この周辺は明治期以降多くの銀行が立地した所であるが、近年の金融機関の統合・再編の流れの中で多くの建物が売却された。現在では石造りの外壁の一部だけを残した、民間のオフィスビルや高層マンションが建てられている（図3）。



図3 旧横浜正金銀行本店本館(上)
オフィスビル(左下)と高層マンション(右下)

赤レンガ倉庫から象の鼻パークに至る途中に横浜税関とクイーンズの塔(高さ51m)がある。幕末期、幕府は神奈川奉行所を開設し、その一機関として神奈川運上^{うんじょうしょ}所を設置した。運上所は、外国に関する事務・港湾行政・刑事・船舶修理などの監督を扱う総合的な役所で、現在の税関や県庁の前身である。1871(明治4)年明治政府によって運上所は横浜税関に改組された。庁舎は多様な文化が流れ込む貿易港を意識して、世界各地の建築様式を取り入れ1931(昭和6)年に

竣工したもので、第二次世界大戦後、マッカーサーが連合軍最高司令官総司令部(GHQ)を設置した建物でもある。「クイーンズの塔」は、神奈川県庁本庁舎の「キングの塔」(高さ49m)、横浜市開港記念会館の「ジャックの塔」(高さ36m)とともに親しまれている(図4)。



図4 横浜税関とクイーンズの塔

大棧橋埠頭に至る手前に横浜開港資料館がある。館内には日本の開国・開港関係資料が展示されている。資料館の隣には開港広場があり、その一角に日米和親条約調印の地の碑がある。

以上、外国人居留地・日本人居留地がおかれた開港場横浜の関内地区を中心に巡検の報告をした。一度は少し時間をかけて歩きたい場所である。



図5 横浜市関内地区の遠景

トライ地理20について

山 本 敦 (県立相模原中等教育学校)

教材委員会では高等学校新地理演習帳およびトライ地理20の2冊を、帝国書院を通して編集・発行している。2冊については、毎年地理紀要にて紹介しているので、だいぶおなじみのものになってのではないと思われる。このような演習帳は一般の出版社からもそれほど出ているものはないので、ある意味貴重なものではないかと思う。発行してから30年をゆうに越え、版を重ね出版してきたが、ここ数年は数値統計など部分改訂を繰り返してきた。

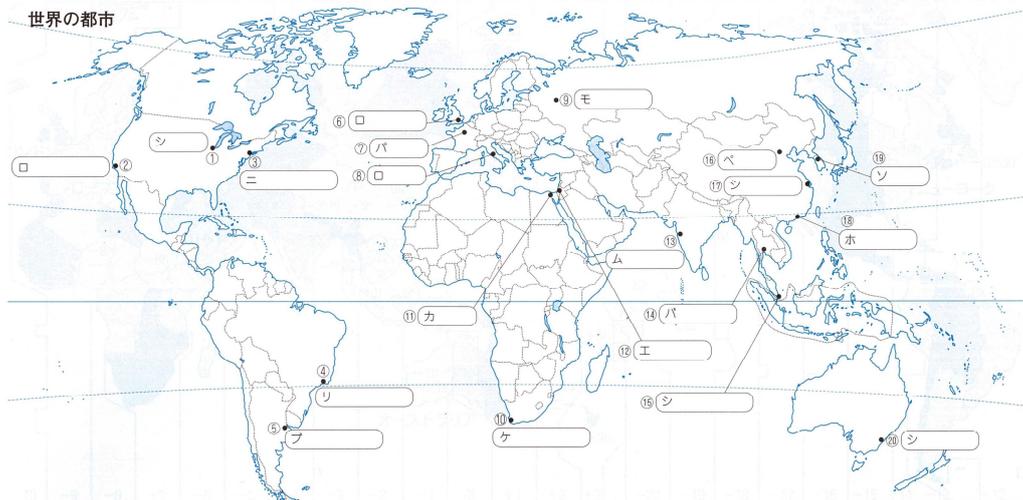
平成30年度以降、学習指導要領も改訂されるので、それにあわせて久しぶりに大きく改訂したいと考えているが、採用数が少ないなか、どのくらいの規模や内容にするかは、帝国書院との話し合いが必要になってくるであろう。

今回は、トライ地理20の紹介をしようと思う。新地理演習帳が大学受験にも対応しうるものを用いるということで、幅広く内容も濃いものを目指して作成されているのに対し、トライ地理はむしろ地理が好きでない、苦手な生徒をターゲットに少しでも興味関心がもてるようにという思い

で作成した。何よりも取り組みやすさを重視し、地図帳を使えば、答えられるようなものにした。欲張らずに内容を精選し、最低限必要と思われるものを網羅した。いくつか編集上の特徴を紹介したい。

- ・基本1ページ20程度の項目におさえ、10分程度で完成できるようにした(図1)。
- ・ほとんどの項目にヒントがのせられていることにより、解答を導きやすいようにしてある(図2)。
- ・高校ではふれない日本についても観光地や特産品などから都市や都道府県が理解できるようにした(図3)。

現任校では、後期生(高校生)に限らずむしろ前期生(中学生)に対しての教材として適当でないかと考えている。後期生では、朝学習の課題や自習課題、時間が余ったときのちょっとしたプリント、休み中の宿題など多方面で活用できる。なお、提出しやすいよう1ページずつ切り離しができるようにした点も付け加えておく。



【作業】
地図中の○に①～⑳のヒントと地図帳を参考に都市名を記入しましょう。(解答欄には最初の1文字が書いてあります。)
【ヒント】
①ミシガン湖畔にあります。
②映画産業の中心、ハリウッドがあります。
③自由の女神がある世界的な大都市です。
④カーニバルで有名なブラジルの都市です。
⑤アルゼンチンの首都です。
⑥中心をテムズ川が流れています。
⑦エッフェル塔があります。
⑧市内にパチカンというもう一つの国があります。
⑨世界で一番広い国の首都です。
⑩南アフリカ、喜望峯の近くの港湾都市です。
⑪ピラミッドのある国の首都です。
⑫ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地です。
⑬アラビア海沿岸、ボンベイとよばれていたインド最大の都市です。
⑭チャオプラヤ川河口にあるタイの首都です。
⑮東南アジア経済の中心都市です。
⑯2008年にオリンピックがここで開催されました。
⑰中国経済の中心都市です。
⑱1997年イギリスから中国に返還されました。
⑲アジアで2番目のオリンピック開催地です。
⑳オーストラリア経済の中心都市です。

図 1

11. 世界の都市

年 組 番 名

地理学カテストと2016年度の問題について

伊藤 直樹 (栄光学園高等学校)

はじめに

地理分科会テスト委員会で作成する問題が、県一斉テストから授業や実力テストで使用することを前提とした問題に移行して4年が過ぎた。他の委員会と同様に、テスト委員も長期的に減少してきたが、新しい方の参加もあり、例年とほぼ同じ数の問題を作成することができた。

今年度は新しい試みとして、数十字程度の論述問題を、一部の大問に取り入れた。限られた選択肢の中から正解を選び出す力のみならず、生徒自身が解答を作成する力をつけてゆくことが大切なのは論を待たないし、大学入試センター試験の姿も変わろうとしている昨今、少しでもお役に立てるものが提供できないだろうか検討した。また選択肢ではなく、用語や地名等で解答する問題も少し増加させる方向で考えた。

以上のような変更により、従来1つの大問に対し小問10問という構成から、論述を含む場合は、論述の配点を倍にした関係で、小問を1題減らすこととした。また解答用紙も解答欄が増えるため、少々様式を変えた。

問題の難易度としては、地図と地域調査以外のものについて、基本的な事項を確認することを中心とした「基本問題」と、大学入試センター試験程度の内容を含む「発展問題」という位置づけをしている。

問題と解答用紙および解答(例0)は別フォルダーに全問収められているので、そちらを参照願いたい。昨年度以前の分の問題も地理紀要や地理分科会のホームページに掲載されているので、今年度のものだけでなく、過去ものを適宜組み合わせることも可能である。文末に4年分の内容・地域別問題リストをまとめて掲載した。ホームページの分については、パスワードが必要なので、不明の場合はお問合せいただきたい。パスワードは1度入れれば複数年度分、閲覧可能である。今後も可能な範囲で毎年問題を蓄積することを目指してゆきたい。

【1】地図と地域調査

北海道室蘭市の地形図を使用した問題。

問1 地形図の基本的事項を問う内容となっている。主曲線・計曲線が何mごとにひかれているかによって、縮尺を判断する。 $25,000 \times 4\text{cm} = 100,000\text{cm} = 1,000\text{m} = 1\text{km}$ となる。

問2 地図記号も地形図の出題では基本的事項となっている。裁判所の地図記号は、消火活動に使った「さすまた」に由来し、郵便局は、郵便局が通信省と呼ばれていたことから、「テ」を図案化したものになっている。図書館と老人ホームの地図記号は、比較的新しい地図記号である。図書館の地図記号は平成14年から使用されており、老人ホームの地図記号は平成18年から使用されている。小中学生から公募された地図記号で、風車の地図記号も公募されている。地図記号は時代に合わせて新たに作られるものもあるが、一方で使われなくなるものも存在する。

問3 道路がまっすぐ伸びていくこと、線路が見当たらないこと、写真の奥に標高の高いところがあることから解答を導く。東室蘭駅から延びるこの通りは、電線を地中化するなどの景観配慮もしている。

問4 断面図であるが、等高線を丁寧に読み込んでいくとよい。Xの地点から標高が少し上がった後、その後下がる。そしてYに近づいていくと、若干高くなった部分、標高50mほどの地点があるが、また標高が下がった地点となる。最後、Yに近い部分では標高は高くなり、XY間では最も高い地点となっている。

問5 各地点の標高がわかればよい。

問6 図中のJR線は複線である。単線と複線は地図記号から判断することが可能である。

問7 工業用地を確保するという目的で土地開発を行うことはあるが、この範囲で山地を切り開いているところは、住宅用地となっているところが多い。工場の地図記号などがみられないことから判断をする。

問8 ①の一定数量当たりの金額が最も小さいのは、魚類のため誤り。③は魚類の数量が2012年から2013年にかけては減少しているため、誤り。④の水産動物類の数量に対する金額は変動

があるため、誤り。よって正解は②となる。ちなみに水産動物類はナマコなどが相当する。

問9 製鉄業をもとにして発展した都市でないのは、④の豊田市である。豊田市は、自動車産業で栄えた都市で、トヨタ自動車の企業城下町として知られている。

【2】自然環境 ヨーロッパ・北アメリカ [発展問題]

ヨーロッパと北アメリカを中心に自然環境についてセンター試験も考慮したうえで作問した。レベル的には中の上。

問1 ヨーロッパの自然環境を考えるうえで基本的な問題。語句を正確に使えるかがポイント。ヨーロッパは日本などに比べて高緯度だが、暖流の影響で沿岸部の気温は冬でも他の地域に比べ高い。

問2 基本レベルの問題。ガリシア地方のリアスバハス海岸からこの名前が付けられた。フィヨルドとの違いに注意。

問3 基本レベルの問題。この地方風からフェーン現象の名前が付けられた。湿潤風と乾燥風の気温遞減率の違い。ボラは冬季に内陸からアドリア海沿岸へ向けて吹く低温乾燥風。

問4 Aはパリ(Cfb) Bはローマ(Cs) Cはウィニペグ(Df) Dはニューヨーク(Cfa)

パリとニューヨークの判別は気温の年較差で判断する。少し難しいが、ローマとウィニペグが分かれば解答できる。

問5 ①はナセル湖 ③はアラル海 ④はバイカル湖をモデルとした。

問6 ①の鉄鉱石が誤っている。アパラチア炭田とメサビ鉄山が水運で結びついてピッツバーグなどで鉄鋼業がさかんとなった。

問7 ①はメコン川 ②はコロラド川 ④はナイル川をモデルとした。

問8 エスチュアリーは河口が沈降してできる地形。良港となることが多く、大西洋沿岸に多く見られる。ラプラタ川やテムズ川が好例。オリノコ川の河口は円弧状三角州。

問9 「地中海」というのは地形用語。北極中心の地図を見ると理解できる。

【3】資源(金属) [発展問題]

金属資源の中でも産出量の多い、鉄鉱・銅鉱

・ボーキサイト、およびレアメタルを題材とした問題である。鉄鉱の産出だけでなく、身近でこれらの金属が使われているものへの理解も深めてゆきたい。

問1 金属鉄の産地に関する基本的な問題。鉄鉱は各地に比較的広く分布、銅鉱はアンデス山脈やアフリカの銅ベルトに注目。

問2 鉄鉱を原料とする製鉄・鉄鋼業の問題。[設問1]では近代的な高炉で石炭が大量に使われることから、製鉄業の立地を考えさせることへと説明がつけられる。[設問2]では中国やインドの急増に注目したい。

問3 銅に関する問題。現在でも電気機器工業での重要性は変わらないが、光ファイバーなどの新しい素材との競合なども考えさせたい。

問4 アルミニウムに関する問題。軽く熱を伝えやすい性質はアルミ缶で実感しているだろう。電力を多く必要とする、製鉄とはまた異なる工業立地にもふれておきたい。

問5 問6で問われているレアメタル(希少金属)の生産量の多い国として、南アフリカ共和国やオーストラリア・ロシア・中国などを意識しておきたい。なお解答としては南アフリカ共和国がもっとも丁寧だが、南アフリカ・南ア共和国・南ア等も正解としてよいだろう。

問7 身近にあるスマホや携帯電話、パソコンなど小型化し、かつ高い性能をもつ機器類にレアメタルがいろいろ用いられていることを意識させたい。リサイクルという用語が一つのポイントになるので、問題を少し易しくするために、用語指定をするのも1つの方法だろう。また解答の内容や分量により部分点を与えてもよい。

【4】人口、都市・村落、生活文化、民族・宗教(総合的出題) [発展問題]

人口・都市の問題であるが、特に第二次世界大戦後の人口動態や都市の変化についての理解が、基礎にあるものとして出題されている。

問1 第二次世界大戦後の人口の変化が大陸によって異なっていることを確認する問題である。

問2 人口ピラミッドに関する問題

[設問1]第二次大戦後のドイツの人口変化の理解が問われる問題である。他は①アメリカ合衆国 ③ロシア ④中国

[設問2]日本の人口構成を確認する問題である。

男女の平均寿命の差に着目したい。

問3 合計特殊出生率の理解を問う問題であるが、各国の大まかな推移を把握しておきたい。

問4 日本の合計特殊出生率の変化について言及している。

問5 日本とニジェールおよび中国の推移を問う問題であるが、左と右のグラフの縦軸の単位の違いに注意したい。

問6 人口の都市への集中は世界各地で見られる現象である。写真から推測する問いで、日頃からニュース・新聞などで情報を得ておきたい。

問7 都市人口の変化が地域によってどのような傾向を示すのかを理解しているかが問われている。

問8 人口構成が地域によってどのような経緯で特徴的になっているかが問われている。

【5】地誌 アフリカ [基本問題]

アフリカの地誌について、教科書レベルの問題を中心に出题した。

問2 アトラス山脈は新期造山帯。④のヒマラヤ山脈以外の選択肢は古期造山帯に属する。

問3 ②睡眠病はツェツェバエが媒介して感染する。

問4 カッパーベルトのカッパーは銅を意味するcopperである。

問5 ①のチュニス当てはまる。地中海性気候に属し、オリーブの生産が多く、イスラームの国であるため、豚肉は食さない。

問7 正答のえは、ナイジェリアを示している。

【6】地誌 南アメリカ [基本問題]

南アメリカの地誌について、ブラジルを中心に出题した。大半が教科書に記載されている基本的な問題で構成しているため、定期試験や実力を図るには最適なレベルであると思われる。

問1 赤道が通過しているエクアドルやガラパゴス諸島、アマゾン川の河口に着目したい。

①の線は北緯10°、③の線は南緯10°、④の線は南緯20°を表している。

問2 B国がペルーであることに着目すると、選択肢は②と④になる。西岸砂漠であるナミブ砂漠はアフリカ大陸にあり、ベンゲラ海流は南大西洋のアフリカ西岸を北上す海流であることが理解できれば、正答を判別できる。

問3 $(東経135^\circ + 西経45^\circ) \div 15$
 $= 180 \div 15 = 12$

東京よりリオデジャネイロの方が12時間遅いので8月5日午後8:00となる。基礎的な時差の計算はおさえておきたい。

問4 経済格差が拡大したため、このような地区が存在していることに留意する。世界各地にスラムはあるが、ブラジルではファベラという。オリンピック開催前にはマスコミ等で報道されており、基礎知識として定着させたい。

問5 沿岸部から内陸部へ移転しているということから地図から判断し、「格差」・「内陸」という言葉から経済格差解消のため移転したという点に着目したい。この都市の移転は、19世紀に提案され、内陸部に新しい首都をつくれれば、人口が集中している沿岸部から人々が移住することが予想された。また、ブラジルの経済の中心地から政治権力を切り離すこともできた。首都の移転が現実化したのは1950年代の高度経済成長期である。ブラジリアは5年の年月をかけて完成し、1960年に首都になった。当初は、ブラジリアは風変わりな建物のせいで奇妙な都市に見え、多くの人々が定住するまでに数年間かかった。現在、250万人の人が住むブラジリアは、1987年にユネスコの世界遺産に登録された。

問6 ブラジルは鉄鉱石の産出量が世界第3位。

問7 ②は北米自由貿易協定でカナダ・アメリカ・メキシコが加盟。③はアジア太平洋経済協力会議で、アジアや太平洋諸国が加盟する。ブラジルは太平洋ではなく、大西洋に面している。④は東南アジア諸国連合で、東南アジア10カ国が加盟する。

問8 ムラートとの区別を明確にしたい。ムラートは、ヨーロッパ系白人とアフリカ系黒人の混血である。

問9 「飼料や肥料に利用される魚」という点から大量に獲れる魚というところに着目したい。①は北半球に分布、②は北太平洋に分布、④は北半球のみに分布している。

※南半球にはサケ(サーモン)は存在せず、サーモンと名のつくものはトラウト(マス)である。現在、養殖・輸入されているものは正式にはトラウト(マス)である。

【7】地誌 南アジア・西アジア [発展問題]

南アジアから西アジアにかけて、アジアでも乾燥した地域を中心とする問題である。

問2 Iは夏の時期に乾燥する地中海性気候なのでA(イスタンブール)、IIは乾燥しているが短い乾季があるステップ気候なのでC(ラホール)、IIIは年間を通して乾燥している砂漠気候なのでB(リヤド)、IVは年中高温で雨季に大量の降水が見られるサバナ気候なのでD(ムンバイ)である。

問7 パキスタンとイランの国民は大部分がムスリムなので、ブタの飼育はないと判断できるので、ウシとヒツジの組合せになる。インドはウシの飼育頭数が世界一位であり、イランの国土の大部分が乾燥気候であることから判断すると、Aがウシ、Bがヒツジになる。

問9 一般に1人あたりGNIが少なく、貧困率が高い国ほど、人口増加率が高くなり、人口の抑制は困難だといわれる。バングラデシュは1人あたりGNIが少なく、貧困率が高いにもかかわらず、人口増加率と乳幼児死亡率は表の4か国の中で最も低い。その背景には、グラミン銀行によるマイクロクレジット(少額貸付制度)や地方の村への診療所の設置など、女性の自立を積極的に支援する動きや政策があるといわれている。

2013～16年学力テスト内容・地域別問題リスト 地図と地域調査

- 2016【1】(地形図：室蘭)
- 2015【5】(地形図：千葉県北部)
- 2014基本【1】(世界地図と地形図：京都府)
- 2014発展【1】(地形図：金沢)
- 2013基本【1】(地形図：境港)
- 2013発展【1】(地形図：富士宮)

自然環境

- 2016【2】(ヨーロッパ・北アメリカ)発展
- 2014基本【2】(ユーラシア)
- 2014発展【2】(北アメリカ)
- 2013基本【2】(総合的出題)
- 2013発展【2】(ヨーロッパ)

人口、都市・村落／生活文化、民族・宗教

- 2016【4】(総合的出題)発展
- 2015【1】(東南アジア)基本

- 2014発展【3】(マレーシア)
- 2013基本【3】(ヨーロッパ)
- 2013発展【3】(ヨーロッパ)

その他

資源

- 2016【3】(金属)発展
- 空間把握
- 2015【6】(神奈川県・地中海世界)

アジア

- 2016【7】地誌(南アジア・西アジア)発展
- 2015【1】人口・都市等(東南アジア)基本
- 2015【2】地誌(中国)基本
- 2015【3】地誌(インド世界)発展
- 2014基本【2】自然(ユーラシア)
- 2014発展【3】人口・都市等(マレーシア)
- 2013基本【4】地誌(アジア・アフリカ)
- 2013発展【4】地誌(アジア・アフリカ)

アフリカ

- 2016【5】地誌 基本
- 2013基本【4】地誌(アジア・アフリカ)
- 2013発展【4】地誌(アジア・アフリカ)

ヨーロッパ

- 2016【2】自然(ヨーロッパ・北アメリカ)発展
- 2015【4】地誌 発展
- 2015【6】空間把握(神奈川県・地中海世界)
- 2014基本【2】自然(ユーラシア)
- 2013基本【3】人口・都市等
- 2013発展【2】自然環境
- 2013発展【3】人口・都市等

南北アメリカ

- 2016【2】自然(ヨーロッパ・北アメリカ)発展
- 2016【6】地誌 基本
- 2014基本【3】地誌(オセアニア・南アメリカ)
- 2014発展【2】自然環境(北アメリカ)
- 2014発展【4】地誌(南北アメリカ)
- 2013発展【5】地誌(北アメリカ)

オセアニア

- 2014基本【3】地誌(オセアニア・南アメリカ)

編集委員（企画委員会）

岩 佐 賢 史（神大附）
岩 崎 浩 実（茅ヶ崎・定）
斉 藤 正（生田）
土 谷 優 子（鶴見総合）
中 島 功（有馬）
根 元 一 幸（座間）
福 元 雄二郎（神大附）
古 屋 明 子（釜利谷）
村 木 憲（横浜）

2017年3月8日発行

編集発行 神奈川県高等学校教科研究会
社会科部会
地理分科会

発行者 井上達也
〒253-0084
神奈川県茅ヶ崎市円蔵 1-16-1
TEL（代表）0467-52-6601